

第50回 特攻観音年次法要 9月23日

参列者 遺族 四九組
 来賓 三〇人
 会員 二二六人
 司会兼兼英史
 式次第 梵鐘点打 伊藤直之
 式衆入道 金龍山浅草寺
 清水谷孝尚大僧正以下
 国歌斉唱
 山主願文 観音寺住職太田賢照
 読経 清水谷大僧正以下
 祭文 奉賛会長瀬島龍三
 追悼の辞 遺族代表 富岳隊
 曾我邦夫弟曾我睦郎
 戦友代表 六〇一空
 宮下八郎
 電文披露 事務局長
 献吟 吟 石橋一歌他
 笛 逢坂竜信
 ラップ献奏 海軍軍装会ラップ隊
 焼香
 式衆退堂

報 特 攻

平成13年11月

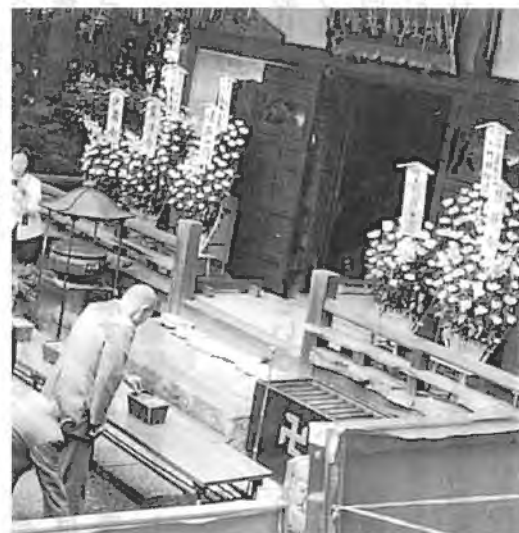
第49号

〒105-0001 東京都港区
 虎ノ門3-6-8 第6森ビル
 財団法人 特攻隊戦没者
 慰霊平和祈念協会
 電話 03(3432)1090
 F A X 03(3432)5567

編集人 田中賢一
 発行人 木村元正



献吟 吟 石橋一歌ほか
 噫特攻 詩 永野秋則
 風蕭蕭月半輪煌 太白中天島島蒼
 運命定茲空決戦 敢然当敵艦勲芳
 今日も亦 黒潮躍る海洋に
 飛び立ち行きし 友は帰らず
 紅顔痛未桜花蕾 今夕又翔求巨舫
 飛燕不帰無限思 英魂鎮此漲靈光



特攻観音法要

傾きゆける 戦勢を 我が身以て支えんと
 死地に投ぜし特攻隊 齋き祀れる 観音に
 額突く我等歳経りて 六十年は 夢のうち
 後に続くを信ずると 遣して往ける戦友に
 往再過ぎし 半世紀 詫びる心で手を合せ
 霜頭禿髮 佇めば 臉に浮かぶ 若き面
 堂宇に洩れる観音経 香の煙のただよいて
 南無特攻 観世音 台の上に 並び立つ
 在りし姿の 幻か 心に沁みる思いあり

目次

特攻観音年次法要	1
漢詩 偲特攻烈士	20
桜花特攻についての座談会(続)	3
特攻隊員の人を恋うる歌③	21
戦史叢書にみる第一神風隊	9
特攻戦死した人達の文集	22
カミカゼとデイソンさん	17
忘れ難い人達 回天⑨	26
特攻機突入 西野少佐の手記	18
ホームページにみる若い人達の心情	28

檄^①

夫れ人間に徳目と称するもの数多あれど 国家民族の爲身を捨つることの崇高 之に過ぐるものなし 戦勢日に非なる秋 欣然死地に投ぜし特攻隊員の 至高至醇純一無雑は 万世の龜鑑たり

大廈の將に倒れんとするや 一臂支うる能はざるを知るも なを釈然一命を擲ちしは 後に続く者あるを信じ 後世を奮起せしむるを期したればなり 戦熄み 我ら後に続くを得ずして 今日に至る

忍び難きを忍べとの御勅畏み 生業の道に勤しみ 国に今日の繁栄をもたせり 然れども偷安久しきに及び

己あつて国家あるを知らず 権利あつて義務あるを弁えざる徒輩 巷に溢れ マスコミ亦公器を弄び 虚構の世論を醸成し憚るなし 東京裁判史観に洗脳されし政治家共 社稷を思う念薄く 恬とし隣国の悔を受く 文教に携る者 邪説に蝕まれ 民族の将来を危くす 国家の無理想 社会の無節操 ここに極まるというべし

嘗て屈原 国を憂いて離騷篇を遺せり 楚王之を俳し遂に国を滅すに至る 殷鑑ここにあり 経済の繁栄の如き 槿花一朝の夢と化せん

我ら頽齡に及びて 再び国難に遭う 掉尾の勇を奮いて 特攻烈士の精神を世に宣揚し 狂瀾を既倒に廻らさずんばあらず 是れ後に続く所以なればなり

①「檄」とは古代中国で役所が木の板に書いた布告文をいう。それから転じて現在わが国では、叱咤激励する事を檄を飛ばすと言っている。ここでは老兵に対し強く訴える（結論は末尾の三行）ためこのような文体を使った。

②人間をじんかんとよむ、世間の意味

③「大東亞戦争終戦二際シ陸海軍人ニ賜リタル勅語」の末尾で「忍ヒ難キヲ忍ヒテ国家永年ノ礎ヲ遺サムコトヲ期セヨ」と仰せられている。

④東京裁判史観とは簡単にいえば、裁判の仮面を覆った戦争の継続であり敵国である日本を悪しざまにいうのは当然のこと、わが国が独立を回復した後も彼らの言い分を信じている頭腦の持ち主が要路に多く、これが国を誤るもとなつてゐる。

⑤恬としとは平気でもというか、隣国の悔りを受けても恥とは思はぬ、わが国で使う教科書について口出しさず、靖国神社に参拝は相ならぬと言はれても怒りもしないのが今の日本なのだ。

⑥屈原は中国の戦国時代礎の重臣であつて、齊と結んで強國秦に対抗しようとした。政権内の別の一派は秦の武力を恐れ、秦の意に従い齊と断交しようとし、王に屈原を纒言した。王は屈原を追放してしまふ。屈原は国を憂いつつ、汨羅に身を投げて死ぬ。彼は卓見の政治家であるとともにすぐれた詩人でもあつた。彼の編纂した礎辞という詩集に離騷と題する一篇がある。離とはかかる、騷とは愁いという意味であり、内容をみればわかるが憂國と解すればよい。屈原を斥けた礎は結局秦に滅ぼされてしまふ。

⑦殷鑑遠からず、という言葉がある。殷の人の戒めとすることは、すぐ前の夏（か）の時代にある。夏が暴政によつて滅んだことを戒めとせよというのである。ここではわが国の現状このままでは夏の轍を踏むぞという意味でつかった。

海軍神雷部隊

櫻花特攻について座談会

平成13年4月22日 水交社に於て

應答者

海兵71期神雷部隊櫻花隊分隊長

元海軍大尉 湯野川守正

質問者

自衛隊空挺教育隊二尉 久我健児

東洋大学 学生 牟田陽一

明星大学 学生 久田広光

(学生2人は金城和彦相談役推薦)

陸軍空挺隊 田中賢一

司会進行・記事編集

飯野伴七 元海軍大尉戦闘機

(続き)

○櫻花二二型の採用

湯野川 ちょっと話それますけど、

銀河に積むことになって、昭和20年の8月には銀河の神雷部隊、銀河隊というのがあったんですよ。出てませんけどね。そのときは二二型で行かなくちゃいかんなどと思って、二二型の戦闘準則、われわれは一番下っ端でそんなこと書く柄じゃないのに、二二型の戦闘準則

(案)を書いたんですね、上司に提出したんです。最後は二二型で行くと思いました。

牟田 戦闘準則ってなんででしょうか。

湯野川 戦い方の基礎、基準、こういう戦い方をすれば大丈夫だ。各戦闘部隊に戦闘準則や戦闘規則があるんですよ。そういうことで戦いの基準が示されている。

飯野 私最後に聞きたいことがあるんですが、終戦の処理でいろんな意味で苦労されたことがあるんで、その前にもう少し技術的とか、あるいは何かで聞きたいことがあれば。

久我 私はいま空挺教育隊の方でレインジャー課程ですからその方を教えてるんですが、実戦を目の前に控えた訓練の内容を詳しく知りたいんですけれど。

湯野川 訓練といってもいろいろな種類の訓練があります。櫻花搭乗員としてだけの訓練もあるし、櫻花と陸攻隊の訓練もあるし、それから陸攻隊を直接守る直掩戦闘機隊、それから間接掩護をする戦闘機隊、そういう戦闘機隊各隊の訓練もいろいろな関係がありますが、最初に櫻花だけの訓練については、零戦の滑空訓練をやって、ダートと櫻花を飛行場に入れるように滑空訓練と、あとは零戦にエンジンいっぱい、

襲撃訓練と、櫻花隊というだけについては非常に簡単で、それしかやりません。ただ、あとで訓練期間が長くなると富高(宮崎県北部にある飛行場)に行ったときは、水上機から戦闘機に変わってきた連中なんかの教育もやらなくちゃならなかったから、私は分隊長で戦闘機の搭乗員だから、その連中を引っ張り回しましていろんな曲技飛行もやりましたけどね。やったけれども、

本来の訓練というのはそういう滑空訓練と襲撃訓練だけです。襲撃訓練はもちろん実際の航空母艦を大分湾に浮かべそれを目標にして、空母を相手に突っ込む、そういう訓練もやりました。

私たち陸攻に乗ったのが直掩戦闘機と一緒にやる訓練もありますしね、それから陸攻に乗って、このこ行ったんじゃ途中墜とされる。だから夜明け、あるいは日没、そういうものうまく櫻花が使えないかと。私の同級生と一緒に乗って研究する、そういうものがありますけどね。本来の櫻花隊の訓練は、着陸訓練と襲撃訓練だけです。た

くさんの後継者が襲撃の訓練をするために新しく受け取った零戦の試運転をやりますから、その意味では古い搭乗員が訓練ではなくて試運転で、飛行機の悪い、悪かったらすぐ直させるということはもちろんあります。それ

は訓練といえない。試飛行というべきかな。

飯野 久我二尉の職務は空挺の落下傘ですけど、どんな内容ですか。

久我 敵中もしくは敵の後方に落下傘で降りる。

飯野 空挺部隊が。

久我 そうです。

飯野 やはり航空力学の要素がたくさん要る方ですね。

田中 櫻花訓練のときに、着陸したら捨てちゃうんですか。回収して使えるんですか。

湯野川 二千三百メートルの砂浜の上で飛行機のソリでスルスルスルと滑り込んでやるから何十回でも使えます。壊しませんから。これは櫻花のK1という、訓練の1という意味でしょう。全部訓練はそのK1で。ほんとの櫻花は一トン二〇〇の爆弾が入ってますからね、重くてこんなものを使ったらえらいことになりますから、最初は水を入れたんです。空中で水を抜いて軽く

してから着陸訓練をしたんですが、一番最初の刈谷さんが水の抜き方が十分で事故で下に降りてから死んだものですから、それから水を入れずに全部K1で軽い櫻花で訓練しました。

飯野 最初はほんとの重量ぐらいで上がって途中抜くんですか。

湯野川 そう。水がシューッと出てきれいなんですよ。その前に乙の七期の長野飛曹長が百里ヶ原でやったんですが、水がシューッと、実にきれいですね。

久我 情報というものはどのレベルまでは分かっていたんですか。最前線は分かっていたとしても。

湯野川 情報の種類にもよりますが、われわれの搭乗員ばかりでないで、分かってる状況というのは、ごく自分の周辺と、それから伝聞によることぐらいしか分かりませんね。あと詳しく知ってるのは、日米両方の資料を全部取り寄せて、それは戦後ですよ、自分の部隊の身の回りのことと、それから周りがある見聞が入ってきたりすること以外は情報はないと思っていただけ結構ですな。

飯野 久我さんね、よく決めたところに皆さんホーホーと降りると。定点降着訓練の最初の目標ですか、基礎ですか。

久我 種類あるんですけど、フリーホール、すごい高いところから降りて、自ら開いてやる落下傘については大体その地点に降りることが出来ます。そのために操縦訓練とか、着地訓練とか、まずは落下傘の構造機能を知って、操

縦、着地、そういうものをやると。スポーツバラシューと違いますので、ピンポイントで降りなさいというのはとくに教えられないんです。小隊長、班長の通信が届く範囲であれば、そのへんに降りなさいということですね。ミリミリミリミリとはそんなにいいわな

飯野 先程私が、いやあ、航空の定点着陸だなといったのは、私なんか戦闘機で、とくに海軍は航空母艦なんかに降りることを考えて、「ピシヤッと降りなさい」。それが非常に難しいんです。サーッと降りるだけじゃなくて。

久我 ピンポイントでここに降りなさいということと言われたんですか。

飯野 そう。

湯野川 そうですよ。航空母艦なんてね、上から見るとこんなにちっちゃいしね、そばに行っても波でグラグラ揺れてるんですね。ちよっと滑るとドタンと海に落ちますしね、そこにピタッと降りるためにはかなりのそういう事前の訓練が必要ですね。

陸上にいるときは赤と白の木の目標を見ながらの定点着地です。ちよっと違おうと、すごく違うんです。

飯野 私もそういうのがあるんじゃないかと思って聞いたんですよ。久我 いえ、降りてからがどちらか

というメインですので、ピンポイントではとくには。

湯野川 そうですね。私は千葉県の嶺岡の小さな部隊指揮官をやってますから、レインジャーの方に来てもらって随分訓練やりましたね。

飯野 学生お二人はどちらかという文科系統ですか。

牟田 教育です。

久田 教育です。

飯野 いま聞いてみると、精神面なことが多いと思うんですよ。私どもの協会も、一昨年靖国神社の遊就館の前に飛行服姿の特攻隊像を建てたんですよ。神社の方に参られたときにはそれを見ていただきたい。亡くなられた人のご慰霊と顕彰をやってるんですけどね。

○櫻花を实战装備した場合の運用

湯野川 この質問の終わりから三つ目に答えましょうか。速力が落ちるとか、援護の兵力が少ないとか、運用面の不安について。

飯野 お伺いしましょう。これは他の方ではちょっと説明できないから。

湯野川 援護戦闘機は七二一空には、どっかに書いてありますけど、三十六機が一飛行隊ですが、戦闘三〇五、三

〇六、三〇七、飛行隊の合計百八機付けたんですよ。櫻花を守るために。

援護機がそんなに多かったのは、さっきちらっといいましたけど、おなかの大きいご婦人みただというけど、ほんとの鈍足で百三、四〇ノットしか出ない。キロにして二百三〇キロぐらいしか出ないんですよ。戦闘機というのはマイルにして二百四、五〇は普通に出るんですよ。もっと噴せば二百七、八〇出ますけど。普通は爆撃機の五百メートル上空に位置して、さらにその上を制空隊が自由に守るんですが、同行出来ないんです。爆撃機が遅くて。戦闘機隊の私の同級生の伊沢なんか

われわれの援護をやるというんで、「お前さんを先に殺さないよ」といって、陸攻の周りをグルグルグル、こういう渦を巻きながら援護しなくちゃいかんのじゃないかなんて一生懸命研究してましたね。それは無理だろうと

いったけど。

最終的には戦闘機、3月17日、18日の九州航空戦で、三〇五、三〇六、三〇七、全部アメリカの空母機三百機ぐらいでやられてしまったものですから、戦闘機もほとんど全滅して援護能力失っちゃったんですね。援護なしにはとてもこんな攻撃は成り立たないんです。制空権なしには成り立たないと

いうことは分かった。いや、いたんですけれども、そういうごくわずかな戦闘機しか

出ないことが分かって、やめよう、やめたらいんじゃないかというふうに一

番上の上司が言ったんですが、長官

の宇垣さんが、「いま出さんと使うと

きがないよ。やる」とおっしゃって、

それでいって全滅しちゃうんですね。

この全滅したときの隊長は野中五郎

という有名な隊長で、二人有名な隊長

がいたんですが、その一人で、お兄さ

んは二・二六の野中四郎という陸軍の

革新派の逸材で、その弟さん。学業の

方はともかくもであったんですけど、

実戦の指揮の方はピカ一の人でした。

その人は「俺は夜間雷撃の指揮官をや

らしてもらいたい。櫻花の作戦はいや

か、援護戦闘機の兵力が少ないとか、運用面が不安だらけ。不安いっぱい。

牟田 櫻花そのものはどのくらいの

スピードが出たんですか。

湯野川 それもこれに詳しく書いて

あります。突っ込めば重いからいくら

でもスピードが出ます。最高速度五五

〇ノットというのは一〇〇〇キロぐら

いですか。マッハに近い。

それからロケット二本積んで、ロケッ

ト一本噴かすとヒューッとスピードが

出るんですよ。ロケットは高度を取る

ためにヒューッと上向いて噴かすと、

四〇〇メートル櫻花が上がりますね。

それ三本ないし、最初五本積んだけど、

でいきます。四〇〇〇メートルの高度

だったら二万メートルぐらいいしか行き

ません。

飯野 そのいわゆるマニュアルは知

識と訓練で体得させる。

湯野川 それは櫻花二二型はまた別

で、これはロケットですからね。櫻花

二二型って「初風ロケット」というロ

ケットエンジンで、自力航法ですから

スピードはうんと落ちます。しかし敵

のレーダーに捕まらないように海面を

這って行くというのはかなり有利です。

それから四三型はターボジェットで

しますが、これも突っ込めばいくらで

も出る。炸薬量も大分減らして八〇〇

キロです。

櫻花の最初の一一型は、鈍重で、爆

破する威力はすごいなと思う。

田中 鹿屋の郊外に碑がありますね。

山岡壯八が書いた。

湯野川 あれは小城久作という櫻花

隊の隊員がちょっと山岡壯八氏が従軍

記者でいたとき仲良くなったんで、鹿

屋にも小城が碑を作って、それから神

ノ池、訓練基地があった神ノ池にも碑

があって、そのどっちも山岡壯八が書

いてくれて、山岡さんが死んでから奥

さんも碑のお祭りに来てくれました。

「櫻花隊出撃の地」という碑を小城兵

曹が個人で六百万円程金を工面して作っ

たんです。

牟田 比叡山ておっしゃいましたね。

比叡山てあそこは走るようなところが

ないんじゃないですか。

湯野川 カタパルトを据えて、シューッ

と上から射ち出してバーッと上がって

て。

久田 どうやって上に上がられたん

ですか。

湯野川 ケーブルカーで。資材もみ

んなケーブルカーで運んで。比叡山が

たまたまできかけてたけど、それ以外、

正確には言えませんが、箱根の山と

か、九州の久重山とか、あちこちにそ

ういう基地を作る予定で、櫻花四三型

の開発をやって、これがうまく行きま

してね、櫻花四三型の同じエンジンを

積んだ菊花という、これはターボジェツ

トの飛行機ですが、これの試験飛行が

うまく行きましたね。やったんです。

飯野 船のカタパルトというのはまっ

すぐ横に水平ですが、比叡山とか山の

八〇〇メートルとか、ちょうど前が空

いて下が港ですからね、そこへ速力を

つけるのに斜め五度でも十度でもいい、

そうしてやれば速力が出てヒューッと

上がっていったと思いますよ。

湯野川 エンジンも強力ですからね。

久田 櫻花の機に対する信頼性はお持ちだったんですか。

湯野川 櫻花そのものは操縦性が非常に良くて、非常に使い易い。だから櫻花そのものに対してはみな自信を持って、これは行けると思う。だけど、それを運ぶ運び道具はどうしようもないなどという気がして、だから道具を変えて、銀河とか、さらには自分でカタルトにして行こうという。櫻花はとっても操縦しやすかったですよ。よく言うことを聞くし、舵はよく利くしね、スピードはどんどん出るし。

久田 櫻花を積んでいった陸攻の飛行士というものとよくしゃべって連絡できたんですか、下に吊られて行く櫻花の搭乗員に。通信でなくて直接の声で。

湯野川 櫻花に乗ってる搭乗員と機長の声は直接伝声管でしゃべりますから。「よし、上がってこい」。でも「今から発射するぞ」というのは全部伝声管じゃなくトンツツで。

飯野 そうすると、人間が上がると同じく伝声管も通信の受信機も全部つないで上がる。そのへんがあんな早い速力の中でよくできると思う。

湯野川 早い速力というけども、陸攻から下に乗り移るとき、乗り移って中において、全然風もないですよ。早い

も遅いもね。離されたらとたんに全く自分だけになりますけどね。

飯野 離されたあと、自分で密閉するわけですね。

湯野川 そうそう。

飯野 いずれにしましても相当人知を尽くしてやるわけですよ。

湯野川 そうです。「投下準備よし」「いつでもいいよ」ってね。

久田 やはり「準備よし」というのは、櫻花に乗る人は、気持ちもすごくもう「突撃する」という思いになってるじゃないですか。でも、櫻花が敵の攻撃を受けていて、どっか機関が狂っていたり、動きづらいとき、櫻花が進めないというときもあったんですか。

湯野川 櫻花が離れなくて発進できなかったことが一、二回ありました。バーンといても離れなくて、一、二回ありました。

でも、あとは発進できなかったということはなくて、敵の戦闘機に捕まったりときは大体撃墜されましたね。

久田 もう全体が。

湯野川 逃げられないんです。

戦闘機のわれわれは五〇〇キロ積んで、これは、敵に遭ったらバツと爆弾をすぐ捨てて、戦うわけですよ。あるいは逃げるわけですよ。戦果を上げる

ことが目標ですからね、撃墜されることは最も避けなくちゃいかん。また次の攻撃をねらえばいいので、藤田幸保飛曹という人は、たしか四回目か五回目の出撃でやりましたよ。

うちの司令も「まずかつたらすぐ戻れ。敵の戦闘機に遭ったら逃げる。爆弾を落として逃げる。どうしてもいけなかったら」ということで、そういう指導をしておられますからね。映画にあつたような、ああいう、帰って来たらまずいような空気はうちの部隊は全くない。司令の指導がそうですもの。貴重な飛行機ですからね。

久田 そう伺うと合理的ですね。痛いと思いましたがね。特攻で帰るに帰れないから途中で浜にたどり着いていつまでも逃げ隠れしなくちゃいけなくなつて。

湯野川 そういう話を聞きますけど、われわれは信じられないですな。そういうこともあつたという話も聞きますけどね。われわれ海軍でそういう人もいたのかもしれないけど、まず聞いている範囲内ではないですね。

飯野 久我さんの今やっていることと大分違うところがあるし、何となくチャチだなという感じがあると思うけれども。

○特攻出撃編成の苦悩

湯野川 あまり楽じゃないのは特攻の出撃の順番を書いていくことですな。編成してどういう順番で出すかということを書くときはみなさんね。

飯野 私の同期生が櫻花分隊長で、これが7月、8月になって特攻に出る。あときは零戦で出たんですね。

湯野川 ええ。

飯野 「俺から出るんだ」と盛んにいつてたけれども、上の人が、さらにこれは中級指揮官でありまだこれからと出させなかつたうちに終戦になつたということですね。

湯野川 そうそう、自分が先に出て「ついてこい」というなら楽なんです。指揮官先頭というのが海軍の伝統だから、自分の名前を真っ先に書いて、死んで帰ってくるのは当たり前だけど、君は出ちゃだめだ、出るのは最後でなくちゃだめだといわれるとつらいものがありますな。

久田 自分のかわいがつてる部下の名前を書くときとか。

湯野川 そう。弟みたいにしていて。

久田 いわば死を決定するというか、ご本人が決定するということになつてしまいますけれども。

湯野川 誰でも納得するような、三個分隊の生き残りを全部預かったからね、誰も納得するような書き方をして。確かに自分が目をかけてるやつを書いて出すときはつらいですよ。

田中 櫻花じゃないけど、私は特攻隊を出す立場にいたんです。16年の秋からずっと落下傘部隊におりまして、最後はグライダーに乗る戦車隊ができてその隊長をしていたんです。

都城の飛行場にいたんですが、そして終戦の二週間くらい前に沖繩にグライダーへ自動車を載せて、私のところは戦車もあつたけれども、四輪駆動の小型のトラックも六十何輛か持ってたんです。自動車中隊がありました。

それでグライダーへ小型自動車を載せて、沖繩の飛行場へ着陸して、トラックの上に機関砲を載せて飛行機を撃つて廻るといふ計画なんです。それで二十四名の自動車手を出せ、その中に指揮官を入れるという命令がきまして、機関砲を撃つのは落下傘部隊の者です。

私は二十四名を出すのにどうして人選をしようかと思って中隊長を呼んだんです。予備役特別志願の広田という人ですが、「いや、私が行きます」とすぐいって自分の中隊から二十四名出しました。当時福生の飛行場、今の横田基地へ出しました。その作戦が8月の

18日頃が満月なんです。その頃決行するということになっていたのでその前に終戦になったから不発に終わったんですね。それで向こうで復員したものだから、とうとう福生へ行つて何をしたのかさっぱりわからんままだった。

終戦後、総武線の下総中山の駅の前で露天商をやっている広田に出会い、それで向こうへ行つて何をしていたか、というのがその人の話で分かりましたが、小型トラックの上に機関砲を載せてその訓練をして、グライダーへ載せたり降ろしたりする訓練をしておるうちに終戦になった。誰が言い出したかしらんけど、このままじゃいかんというので、ガリ版で宣伝文を作って飛行機で飛ばして、東京の上空でピラを撒いたけれども、そのうちにみんな冷静になって復員しちゃったということでした。

久田 グライダーを引っ張るといふのは、そのグライダーはエンジンがあるんですか。

田中 敵の上空まで行かないで、途中で、四〇〇〇メートルぐらいの高度で切り放せば三二キロぐらい先まで行きますからね。櫻花の方は自分でロケット発射でしょうが。

○終戦放送と終戦処理

飯野 学生さん、何か。

久田 かわいがっていた部下とか、仲間とか、また上官の方々を多く失われたりされましたけれども、最後の終戦のご詔勅を聞かれたときの心境をお聞かせ願いたいと思うのですが。

湯野川 明日陛下のご放送があると、いうことを聞いたときには、「いよいよよソ連も参戦したと。一億大いに頑張れ」という陛下のお励ましだらうぐらゐに勝手に想像してたら、そうじゃない、戦争終わったという。放送はみながら、ざらざらと整理して聞かしたけど、さっぱり聞かえないんですよ。断片的にしか。

これはいかんと思つて外に出て民間に行つて民間のラジオを聞いたらそれもはっきりしなくてね、ラジオ終わったら、どうも戦争が終わつたらしいという空気が分かってましてね、アナウンサーの話から、すぐ帰つてきて、部隊並んでましたからね、「どうも空気がおかしい。戦争が終わつたよな放送をしてる。われわれはいままで仲間が全力で戦つてきて、たくさん戦死したのは何のためだ。ちょっと私には分からない。分からないけれども、もう少し様子を見たい。また何か指示する」といって解散させたんですよ。

私はすぐ足立飛行長のところへ行つたら、「うーん。俺も分からん」。すぐに、松山の司令に電報を打ちました。

しち面倒くさい電報を打つて、「戦いを継続する以外に道はないと思う」というような電報を打つたんです。それでもウンともスンともない。これはいかなと思つてるうちに、18日に大分の第五航空艦隊司令部に参集すべしが来たからのこのこ行つたわけです。

その頃はまだ各部隊指揮官、「続けなくちゃだめだ」「続けなくちゃだめだ」という人が圧倒的に多かったですね。参謀長なんかもどっちかということに味方するような口ぶりだけれども、長官がピシッと押さえて、それで初めてわれわれは部隊に帰つて隊員によく話をして、今後のことを考えなくちゃいかんというのが空気がだけれども、一般的にはそうだけれども、私だけに、ついでにはもう一つあるんですよ。小松基地の近くの山城温泉で療養中の兵学校元教官の渡辺少佐の処に参上、保科軍務局長書面を見せられ帰つて来た。

飯野 もう一つ、終戦の決断のときに、隊の解散といひますか、その時の話を。

湯野川 これは8月18日に大分の五航艦に集合を命ぜられて行つたんです。さっき読んだようなことで、五航艦の

「戦史叢書捷号海軍作戦」にみる

第一神風隊(しんぷうたい)

神風特別攻撃隊の編成

航空艦隊の実働兵力、

わずかに四〇機

連合軍のレイテ攻略企図が明らかとなった時、第五基地航空部隊では、艦爆二機、戦闘機六機が一三三〇マバラカット基地から発進、レイテ湾内の敵艦船攻撃に向かっただけであった。

比島に敵の来攻があった際、比島正面の海軍航空作戦を主担任とする第五基地航空部隊では、その実働兵力は一〇特設飛行隊の常用数機程度になっていた。二十日三川長官は、捷一号作戦時、十三航艦から一航艦を増援のためあらかじめ部署していたS攻撃隊(零戦三〇機、天山八機)の編成を解き、同兵力の第五基地航空部隊指揮官の指揮下編入を発令した。

第五基地航空部隊の二十日予想実働兵力は、十三航艦からの来援予想兵力も含め零戦三四、偵察機一、天山一、陸攻二、銀河二計四〇機であり、一方陸軍第四航空軍の兵力は十九日午前、「戦闘機一二、軽爆一〇、百式偵四、重爆三計二九機」であった。比島現地

航空部隊の兵力は、陸海合わせても約七〇機に過ぎなかった。

こうした状況下、第五基地航空部隊では十九日夜半、重大な決定がなされていた。それは「神風特別攻撃隊」の発足であった。敵の空母に対し、計画的に体当たり攻撃を行なうべく特別に編成された同攻撃隊は、大西瀧治郎中将の提唱によるものであった。

大西中将の体当たり攻撃決意

十月五日、一航艦司令長官の後任予定者として、軍需省航空兵器総局総務局長であった大西中将が南西方面艦隊司令部附に発令された。同中将は海軍航空の兵術、訓練、技術開発、生産などを担任する要職を歴任し、その現実

に即した積極的施策により、海軍航空戦力の向上に大いに貢献してきた。また実戦部隊に勤務し、その戦力を十分に発揮してきた。そのため同中将は海軍航空の中心的人物とみなされ航空生え抜きの出身もあって、関係者の信頼を一身に集めていた。山本五十六聯合艦隊司令長官が開戦劈頭のハワイ奇襲作戦の研究を、ひそかに同中将に委嘱したのもその一証左である。

大西中将が海軍航空本部総務部長に在任中、わが海軍は南東方面において航空消耗戦に巻き込まれ、補給は間に合わず兵力は極度に減少し、また熟練搭乗員の多数を失ってその術力も一挙に低下し、航空戦力はガタ落ちになってしまった。そのため戦局は悪化の一途をたどり始めた。この戦局打開の方策として航空関係者の間に、体当たり攻撃を主張する者さえ出てきていた。たまたま侍従武官としてこの方面を視察し、その実情を知った城英一郎大佐(航空専攻)は十八年六月、帰京後ひそかに肉弾攻撃(特攻)採用と自分をその指揮官に推薦されたい旨を航空本部の首脳に話した。大西中将も特攻採用の必要性を感じていた折であったが、平常物静かで地味であった城大佐のこの意見は、同中将に一層その必要性を強く抱かせるに至ったとみられる。

大西中将は軍需省に転じ、外部から戦争の推移をながめていた。戦局はますます悪化し、最後の段階に迫いつめられてきた。ところが戦局転換の主役である海軍航空部隊は、搭乗員の術力低下はますます甚しく、また器材の補充難から兵力も整わず、まことに寒心に耐えない状況となっていた。この戦力では到底戦局の転換は期待できないとみられた。伎倆未熟な搭乗員と十分な兵力では、あたら優秀な青年を、大した戦果もあげられずに、ただ大死をさせるようなものであった。同中将はこの難局を打開するには、今こそ戦果の期待できる特攻を採用するほかに方法はない、搭乗員にもどうせ戦死させるのなら、大死でなく赫々たる戦果をあげさせたいものだと考えた。戦局の逼迫に伴い海軍部も万一場合特攻の採用もやむなしと考えて、ひそかに特攻兵器の開発を始めていた時期である。大西中将はひそかに自己の意見を海軍部に伝えていたと思われる。「あ」号作戦の失敗により、戦局は重大段階に突入した。ここにおいて海軍航空の第一人者である大西中将を主作戦正面を担任する一航艦の司令長官に採用し、この難局に対応させることとした。その人選のうらには、戦況によって特攻の採用はやむなしと考え、これを実施できるのは、航空関係者に希望のある大西中将をおいて他にないとの理由もあったのではなからうか。

海軍部、

大西中将の決意に了承を与える

一航艦司令長官の予定者となった大西中将が、やむを得ない場合には急体的体当たり攻撃を行なうことを海軍部に伝えてその了承を得ていたことは十月十三日海軍部の源田實参謀が起案した次の電報起案が残っているとみられる。大西

中将は九日東京発、十二日比島到着の予定であった)

神風攻撃隊ノ発表ハ全軍ノ士氣昂揚竝ニ国民戦意ノ振作ニ至大ノ関係

アル処 各隊攻撃実施ノ都度 純忠ノ至誠ニ報ヒ攻撃隊名(敷島隊、朝日隊等)ヲモ併セ適當ノ時期ニ発表ノコトニ取計ヒ度処 貴見至急承知度(本電案には「一航艦同意シ来レル場合ノ発表時機其ノ他ニ関シテハ省部更ニ研究ノコトト致シ度」との主務者の意見が添え書きされている。

なお本電案は、神風特別攻撃が初の戦果をあげた日の翌日である十月二十六日、機密第二六一九一七番電をもって、大本營海軍參謀部第一部長(海軍部作戰部長)から一航艦長官にあて発信された)

場合の名称などまで、主務者との打ち合わせがすんでいたのである。また源田參謀は零戦一五〇機の準備を同中将に約束したという。

この決意を海軍部に伝えた大西中将は、やむを得ず青年に肉弾攻撃を要求するからには、自分もあとから彼らのあとを追う覚悟であった。これは同中将が終戦直後自刃したことによって示された。

参考

大西中将をよく知っていた航空関係者の間には、同中将は戦争に勝っても死ぬつもりだろうとの噂があったが、彼らは「果たせるかな」と話し合っていたという。

体当たり攻撃実施を決断す

筆者注 当時、一航艦首席參謀猪口力平中佐(のち大佐、現姓 詫間)の戦後の回想によると、「神風」なる呼称は同中佐の提案になる「神風隊」を大西中将が承認し、且つ「敷島」等の隊名は中将自身がつけたという。現地側の「神風」と海軍部の「神風」とは偶然の一致であったのかも知れない。

すなわち、体当たり攻撃を行なった

大西中将は十月九日東京を出発し、十日鹿屋基地に着いた。ところが同日、米機動部隊が沖縄に来襲したので、上海を経由して十一日高雄に到着した。たまたま豊田長官が比島視察の帰途新竹基地にあるのを知り、同日直ちに新竹に飛んで豊田長官を訪問した。臺灣は既述のとおり翌十二日から十四日まで米機動部隊の攻撃を受け、同中将は豊田長官と共に、新竹上空におけるわ

が零戦と米グラマン戦闘機との空中戦闘を見守り、わが搭乗員の練度低下の実状をまのあたりに見て、体当たり以外に方法はないとの感を一層強くした模様である。

大西中将は十六日新竹を出発し、十七日マニラの「一航艦司令部」に到着した。この日、米軍はスルアン島に上陸して来ていた。連合軍の比島進攻の気配がこれから自分率いようとする一航艦の兵力が話にならぬほどに僅小であることを同中将は知った。翌十八日に捷

一号作戦が発動された。聯合艦隊司令部では基地航空部隊の協力下に水上艦隊を敵上陸地点に突入させようと企図し、その準備を進めていた。基地航空部隊としては、水上艦隊の突入日までに、米空母を撃沈できないまでも少なくともこれを撃破して、飛行機だけは

使用できないようにしておく必要があった。しかし決戦まであと幾日もなく、また航空兵力も弱小の現状では、もはや体当たり攻撃の実施に踏み切るしかない。大西中将は決断した。同中将は寺岡長官に自己の決断を述べ、その同意を得た。寺岡長官は後任予定者である大西中将に編成を一任することにした。

航空艦隊首脳に決意を表明す

大西中将は十月十九日、クラーク基地にある七六一空司令前田孝成大佐及び飛行長庄子八郎少佐、マバラカット基地にある二〇一空司令山本榮大佐及び飛行長中島正少佐をマニラの艦隊司令部に召集した。正午過ぎ前田司令一行が到着したので、とりあえず大西中将は長官としての意向を伝えた。山本司令の一行は、午後遅くなっても到着しなかった。途中何か異変に遭ったのではないかと大西中将は心配し、收容かたがた午後四時、中将自らクラーク基地に向いた。当時、クラークからマニラまで自動車で約二時間半もかかり、途中にはゲリラ地帯もあって夜間の通行は危険であった。

大西中将のマニラ出発と入れ違いに五時半すぎ、山本司令一行が艦隊司令部に到着した。山本司令は午後の攻撃

隊の出発を見送ってから出かけて来たため遅れたのであった。大西中将が基地に行くと聞いて山本司令は直ちに引き返すことを決心し、中島少佐の操縦する零戦に同乗して一八〇〇ニコール飛行場を出発した。ところが出発直後発動機が故障し、マニラの陸軍飛行場外の畑地に不時着した。中島少佐は顔面に軽傷を負い司令は左足を骨折した。二人は迎えの車で再び艦隊司令部に戻った。司令の左足は完全に骨折していたが、司令は「足一本折れても航空隊の指揮はできる」といい張って「今大事なときであるから司令の交替はしてくるな」と請うたが、治療に一月を要するとの軍医長の診断で海軍病院に入院することとなった。中島少佐は翌二十日朝マバラカット基地に帰った。

実施航空隊に直接はかる

夕刻(十九日)マバラカット基地の二〇一空本部に到着した大西中将は、早速、同空の主だった者を集めた。航空隊側からは副長玉井淺一中佐、戦三〇五飛行隊長指宿正信大尉、戦三一一飛行隊長横山岳夫大尉が出席し、また一航艦首席参謀猪口力平中佐、二十六航戦首席参謀吉岡忠一少佐が同席した。大西中将は、一同を前におもむろに口

を切って、「戦局は皆も承知のとおりで、今度の「捷号作戦」にもし失敗すれば、それこそ由由しい大事を招くことになる。従って、一航艦としては、是非とも第一遊撃部隊のレイテ突入を成功させねばならぬ。そのためには敵の機動部隊を叩いて、少なくとも一週間位、空母の甲板を使えないようにする必要があると思つ」と述べ、ややあって、「それには零戦に二五〇旺爆弾を抱かせて体当たりをやるほかに、確実な攻撃法はないと思うが……どんなものだろう?」と、一同にはかった。

と云った。既に述べたように、この時大西中将はまだ山本司令に会ってはいなかった。

玉井中佐は大西中将にしばらくの猶豫を請うた。そして、前任飛行隊長の指宿大尉を自室に同行すると、体当たり攻撃に直面する搭乗員の士気について互いに意見を交わし、大尉の見解も自分の意見と同じであることを確かめて、「大西中将の意見に同意したい」と自分の考えを述べた。大尉も副長の意見と全く同じであった。

再び会議が開かれた。玉井中佐は二〇一空としての決意を大西中将に申し述べるとともに、編成に関しては航空隊側に一切を委して貰うよう要望した。その時「うむ」とうなずいた大西中将の顔には沈痛とともに我が意を得たという色が浮かんでいったという。

苦悩の人選

玉井中佐は、体当たり攻撃の効果について吉岡参謀に尋ねた。空母の甲板を破壊して、一時使用を停止させるぐらゐの効果は十分に期待できそうであった。しかし副長の一存で決定するには、事があまりにも重大であった。中佐は司令の意向を確かめたい旨を大西中将に述べた。すると、中將はすかさず「司令には話し済みであり、万事副長に委す、ということであった」

空の司令であったが、この若い雛鳥に大きな期待を寄せ、魂を打ち込んで教育した。その後「あ」号作戦では、これらの搭乗員は玉井中佐のもとで、幾多の悪戦苦闘を続けてきた。次いで十九年七月、航空隊の編制替えが行なわれた際、玉井中佐が副長となった二〇一空に、彼らもまた編入された。その員数は既に当初の三分の一の三〇名になつていたが、苛烈な戦闘を戦い抜いてきたこれら搭乗員は、既に一人前の搭乗員に成長しており、戦闘意欲もまたきわめて旺盛であった。玉井中佐は自然、彼らに深い愛情を持ち、彼らもまた中佐には親に對するような心情を保持していた。そんなわけで中佐は常日ごろ、何とかしてよい機会を見つけ、彼らに立派なお役に立たせてやりたいと考えていた。

そこで、玉井中佐は隊長と相談して、この九期練習生の集合を命じた。集った搭乗員は二三名であった。中佐は戦局と大西中将の決心を説明した。すると彼らは「喜びの感激に興奮して全員双手を挙げて賛成」した。玉井中佐は猪口参謀に「彼らはその心のすべてを私の前では言い得なかつた様子であるが、小さなランブ一つの薄暗い従兵室で、キラキラと目を光らして立派な決意を示していた顔は、今でも眼底に残っ

て忘れられない」と、そのときの感激を述懐したという。

玉井中佐はこの件について絶対に口外しないよう、搭乗員に注意を与えて宿舎に帰らせた。時刻は既に二十日の午前零時を過ぎていた。

こうして体当たり搭乗員の主体である列機は問題なく解決した。残る問題は指揮官の人選であった。玉井副長と猪口参謀との間に相談が始まった。猪口参謀は、指揮官には海軍兵学校出身者から人選することを提案した。体当たり攻撃という任務の特殊性から、その指揮官たる者は人物、伎倆、士気のすべての点で最も優れたものを人選しなければならぬ、と玉井中佐は考えた。

最初、戦三〇六飛行分隊長菅野直大尉が候補にのぼったが、あいにく大尉は内地に出張中であつた。そこで玉井副長は、戦三〇一飛行分隊長関行男大尉を考えた。関大尉は菅野大尉と同期の海軍兵学校第七〇期生で、昭和十九年二月に練習航空隊教程(艦爆)を卒業以来、霞ヶ浦空、臺南空の飛行教官を歴任、同年九月二十五日付で現職に補任され(艦爆から戦闘機に転科)、約一カ月前に比島に転進して来たばかりで、戦闘経験はまだ多くはなかった。しかし大尉は着任後しばしば、玉井中



佐に、熱心に戦局に対する所見を申し出て、すみやかに戦闘への参加を要求したりしていたので、着任後まだ日が浅いにもかかわらず中佐に強い印象を与えていた。

玉井中佐はこの人選について猪口参謀の意見を求め、参謀もこれに同意した。そこで早速、従兵に関大尉を呼びにやらせた。やがて、大尉は士官室に出頭した。玉井中佐は体当たり攻撃隊の指揮官になって貰いたい旨を告げ、大尉の意向を尋ねた。関大尉はしばらく沈黙考したのち「是非、私にやらして下さい」と、明瞭な口調で返答した。

参考

このときの感激的な場面について、猪口参謀は次のように回想している。

玉井副長は、隣りに座った関大尉の肩を抱くようにし、二、三度軽く叩いて、

「関、今日長官が直き直き当隊に来られたのは、『捷号作戦』を成功させるために、零戦に二五〇疋の爆弾を搭載して敵に体当たりをかけたという計画をはかれるためだったんだ。これは貴様も薄々知っているだろうと思うが。ついてはこの攻撃の指揮官として貴様に白羽の矢を立てたんだが、どうか」と、涙ぐんで尋ねた。関大尉は唇を結んで、何の返事もしない。両ひじを机の上におき、オールバックにしている長髪の頭を両手で支えて、眼をつむったまま俯向き、深い考えに沈んでいった。身動きもしない。

しばらくして、彼の手が僅かに動いて、指が髪をかきあげたかと思うと、静かに頭を持ち上げて言った。「是非、私にやらして下さい」。少しの涙もなかった。明瞭な口調であつた。玉井中佐も、ただ一言、「そうか」と答えて、じっと関大尉の顔を凝視していた。急に重苦しい雰囲気が消えた。雲が散って月が輝き出した様すがすがしい感じであつた。

こうして、体当たり攻撃隊二四名の人選が終わった。猪口参謀は、これを大西中将に報告しその承認を得た。十月二十日の午前一時過ぎであつた。攻撃隊は「神風特別攻撃隊」と呼称されることになり、また同攻撃隊は四隊に区分され、それぞれに「敷島、大和、朝日、山櫻」の隊名を付された。

訓示

大西中将は、二十日午前十時、特別攻撃隊全員を二〇一空本部に集め、門出の激励と感激の訓示を行なった。関大尉を右先頭にして、敷島、大和、朝日、山櫻の隊員二四名が並び、玉井中佐と副官(門司親徳大尉)が陪席した。中将の訓示の骨子は次のとおりであつた。

「日本はまさに危機である。しかもこの危機を救うるものは、大臣でも大将でも軍令部総長でもない。勿論自分のような長官でもない。それは諸子の如き純真にして気力に満ちた若い人々のみである。従つて自分は一億国民に代わつて皆にお願いする。どうか成功を祈る」

「皆は既に神である。神であるから欲望はないであろう。が、もしあるとすれば、それは自分の体当たりが、無駄ではなかったかどうか、それを知りたいことであろう。しかし皆は永い眠りにつくのであるから、残念ながら知ることも出来ないし、知らせることも出来ない。だが自分はこのを見届けて、必ず上間に達する様にするから、そこは安心して行ってくれ」

「しっかり頼む」

訓示を終わつて、大西中将は隊員

の一人一人と熱い握手をかわした。
注 猪口大佐の戦後の回想によると、大

西中将は訓示を始めるに当たり、じつと隊員を見渡していたが、少し青さめ、引きしまった口もなかなか重そうであつたという。そして、訓示の進むにつれて、小刻みに体がふるえてきて、また最後に「しっかりたのむ」といって涙ぐんでいたという。

編成の発令

事実上、神風特別攻撃隊の編成を終えて、二十日夕刻マニラの司令部に帰着した大西中将は、同夜二〇〇〇、寺岡前司令長官との交替を終わり、ここに正式に一航艦を指揮することとなった。この日、大西中将は第一航空艦隊司令長官として発令された。同中将は翌二十一日二三〇二二十日着任 長官交代ヲ了ス」と全軍に通電した。
大西長官は就任すると、まず二〇一司令部に対して正式に体当たり攻撃隊の編成を命じるとともに、豊田長官に対し同攻撃隊を編成した旨を報告した。

五 F G B 電令作第五二号

(二十日二三四七発電)

一 二〇一司令部ハ現有兵力ヲ以テ体当特別攻撃隊ヲ編成

十月二十三日迄ニ菲島東方海面ノ敵航空母艦殲滅ニ任ゼシムベシ

二 本攻撃隊ヲ神風特別攻撃隊ト称ス

三 司令ハ今後ノ増強兵力ヲ以テスル特別攻撃隊編成ヲ予メ準備スベシ

発信 第一航空艦隊司令長官 聯合艦隊、南西方面艦隊各指 令長官

通報 第二、第三、第五各艦隊司令 長官、第二航空艦隊司令長官、 大本營海軍部

機密第二〇二三五九番電電

(二十日二三五九発電)

一 現戦局ニ鑑ミ第二〇一海軍航空 隊艦戦二六機(現有兵力)ヲ以テ 体当特攻隊ヲ編成セリ(内 体当 一三機)

二 本攻撃隊ハ之ヲ四隊ニ区分 敵 空母非島東方海面出現之ガ必殺 (海空軍〔空母の誤記か〕当分使 用不能の程度)ヲ期シ攻撃セント ス 成果ハ水上部隊突入前ニ之ヲ 期待ス

三 今後艦戦ノ増強ヲ得次第更ニ編 制ヲ拡大ノ予定

四 本攻撃隊ヲ神風特攻ト呼称ス

その後十月二十二日から二十六日ま での間に、更に零戦四隊(菊水、若櫻、 葉櫻、初櫻)および彗星隊(彗星一機、 十月二十五日)が編成された。各隊は

体当たり攻撃をなすもの二機、直掩、 戦果偵察をなすもの二機をもって一組 とするのを標準とした。なお第六基地 航空部隊においても、十月二十五日の 決戦が終わったのちに体当たり攻撃の 採用実施に踏み切り、二十七、二十九

の両日に彗星計八隊が編成されるに至つ たので、第五基地航空部隊のものを 「第一神風特別攻撃隊」、第六基地航空 部隊のものを「第二神風特別攻撃隊」 とそれぞれ呼称することとなった。

(第一神風特別攻撃隊については後述 する)

出撃、決戦日までの空母撃破成らず 大和隊は編成当日直ちにセブに進出 した。また朝日、山櫻の各隊は二十三 日に、そして菊水隊は二十四日にダバ

オにそれぞれ進出した。かくて二十四 日までに、マバラカットにあったのは 敷島隊だけとなった。

各隊は二十一日から空母攻撃に出撃 したが、決戦日までに、いずれも敵を 捕捉できなかった。この間、大和隊で は未帰還二機を生じた。最初のものは、 二十一日レイテ東方の敵空母攻撃に向

かった久野好孚中尉であった。

この日、大和隊は一三一五セブの一 〇〇度二三五淫に発見を報じられた空 母二隻、特空母二隻基幹の敵機動部隊

を攻撃のため一四三〇、まさに発進し ようとしていた時、敵機の攻撃を受け 全機(六機)炎上した。直ちに予備機 を準備して一六二五、零戦三機(指揮 官 久野好孚中尉)が発進した。攻撃

隊は、途中天候に阻まれ、うち二機は 敵を発見するに至らず帰投したが、久 野中尉機は未帰還となった。久野機の 戦果は、列機が天候不良のため分離し たため不明であったが、「本人ノ特攻 ニ対スル熱意ト性情ヨリ判断シ 不良

ナル天候ヲ冒シ克ク敵ヲ求メ体当り攻 撃ヲ決行セルモノト推定」された。 次いで二十三日、零戦に搭乗して〇

五〇〇発進、スルアン沖の敵空母索敵 攻撃に向かった佐藤馨上飛曹は再び還 らなかった。同機も体当たり攻撃を決

行したものと考えられた。 敷島隊指揮官關大尉は連日の出撃に もかかわらず、いまだに敵空母を捕捉 できないことに深刻に責任を感じ、涙

を流して玉井副長に詫びていたという。 關大尉らの隊が初めて体当たり攻撃に 成功したのは、後述するように、第一 遊撃部隊のレイテ突入日である十月二 十五日のことであった。

神風特別攻撃隊、空母を撃沈

菊水隊、初の戦果をあぐ

第六基地航空部隊がレガスピ―東方

の敵大部隊に全力攻撃をかけている間、第一遊撃部隊と交戦の米空母部隊に体

当たり攻撃を加えていた攻撃隊があった。それは神風特別攻撃隊(敷島、大和、朝日、山櫻、菊水隊)で、この日クラーク、セブ及びダバオの三方面からそれぞれ出撃、その編成以来初めて敵空母の捕捉に成功した。

最初に米空母群を捕捉したのはダバオ発進のものであった。朝日、山櫻、菊水各隊は〇六三〇ダバオ基地を発進、ミンダナオ東方海面に対し索敵攻撃に向かった。

注 当日の各隊索敵攻撃要領は前二十四日、六十一航戦司令官から、次のとおり発令されていた。

T-1 AB電令作第四号

(二十四日二三〇一発電)

- 一 明二十五日神風特別攻撃隊ハ左
- ニ 依り敵空母ノ索敵攻撃ヲ実施ス
- ベシ (隊名、基点、航路、航程ノ順)

朝日隊

ダバオ第二基地、二八度二六三
漚、二九九度二七〇漚

山櫻隊

ダバオ第一基地、二五度二八五
漚、二九五度二五四漚

菊水隊

ダバオ第二基地、二二度三〇〇
漚、二九〇度二四〇漚

- 二 発進時刻 〇六三〇
- 三 飛行機隊ハ「レガスピ―」着後急速補給「マバラカット」ニ進出待機

菊水隊(零戦三機―攻撃一、直掩一)は〇八〇〇ころ、スリガオ東方四〇漚付近で、北進中の空母五隻(うち特空母三)、戦艦二隻を発見した。攻撃隊は直ちに空母を目掛けて突入し、うち一機が大型空母の艦尾に命中したのが認められた。

この戦果は直掩機のセブ帰還後、同基地から〇九四八次のとおり打電された。

特菊水隊(体当り二、掩護一)〇六三〇「ダバオ」第二基地発「スリガオ」島東方約四〇漚(正確ナラス)

ヲ北進中ノ空母五(内 特空母三)戦艦二ヲ基幹トスル機動部隊ヲ攻撃一機正規空母ノ艦尾ニ命中 火災停止スルヲ確認ス

菊水隊の戦果がよく合点できなかったものか、二十七日同隊所属航空隊の司令である二〇一司令から、「戦果ヲ

挙ゲタル菊水隊搭乗員、担任区域至急知ラサレ度」との照会電が発せられ、六十一航戦司令官は同日、「(一)編制特攻菊水隊宮川一飛曹、加藤一飛曹、直掩隊藍森上飛曹計三機 (二)索敵攻撃路」と打電している。

後述の敷島隊よりも約三時間前に体当たり攻撃に成功した同隊は、本来ならば神風特別攻撃隊における、戦果を認められた最初の隊として、その榮譽を与えられるべきであったが、確認に手間どり聯合艦隊司令長官への報告が遅れたためか、その榮譽は關大尉指揮の敷島隊が担うことになった。

朝日隊(零戦三機―攻撃一、直掩一)及び山櫻隊(零戦四機―攻撃二、直掩二)は攻撃隊を見失って、一〇二〇レガスピ―に帰投した。山櫻隊の直掩二機のほか全機未帰還となり、戦果は明らかでなかった。

付記 米軍の戦闘状況

米側資料によると菊水隊が捕捉した敵は、シアルガ島沖およそ四〇漚(栗田部隊と会敵の「タフィ三」の南方約一三〇漚)を行動していたT・スプレ

イグ少将指揮の「タフィー」(護送空母四、直衛駆逐艦八)であった。〇七四〇、同隊は日本軍飛行機六機

の攻撃を受けた(注 菊水隊で突入したのは二機であるから、朝日らの隊も同じ目標を捕捉したのかも知れない)。空母サンチーは丁度、攻撃隊の発艦を終わった時であった。一機の日本軍機が雲の中から同空母めがけて突入して来た。それはあまりに突然であったので、対空砲火を向けることもできなかった。同機は機銃を発射しながら突っ込んできて、飛行甲板左舷前部に命中し、格納甲板に突き抜けた。その爆発で乗員四三名が殺傷され、一五呎×三〇呎の破口を生じ、そして火災を起こした。

火災は一〇分後に鎮火した。(注「サンチー」はこの直後、潜水艦魚雷の命中を受けた。米側資料によると、この潜水艦は「伊五十六潜」であったと誌されている―後述)

この特攻機の突入直後、空母スワンニイの後方で旋回していたもう一機の神風機が、空母サンガモンに向かって急降下した。五〇〇呎まで迫った時、「スワンニイ」から射った五吋砲弾が命中し、同機は海中に墜落した。同じころ、空母ペトロフ・ベイには対空砲火で撃墜されたもう一機の神風機が至近弾となって落ちた。

二機の零戦を撃墜した「スワンニイ」は、今度は自艦が神風機に襲われる羽目になった。同空母は艦尾方向高度八、

〇〇〇呎の雲の中で旋回している三機目の零戦を発見、直ちに対空砲火を浴びせた。すると、同機は横転し「スワンニイ」の右舷側に急降下して来て、後部エレベーター前方に命中、飛行甲板に一〇呎の穴をあけた。そしてその爆弾が飛行甲板と格納庫の間で炸裂し、格納庫に二五呎の穴をあけ主甲板を損傷し、多数の死傷者を出した。格納庫の火災は直ちに消火したが、後部飛行機用エレベーターは使用不能となった。

飛行甲板の損傷は二時間後には着艦可能程度に応急修理ができ、一〇〇九、航空攻撃を再開した。

敷島隊、空母を撃沈す

敷島隊 (零戦九機—攻撃五、直掩四) は、關行男大尉のもとに〇七二五マバラカットを発進、比島東海岸沿いにタクロバンに向かって索敵攻撃の途中、一〇一〇東方スコールの中に、戦艦四、五隻、巡洋艦、駆逐艦等二〇隻以上、F6F二五機在空の部隊が北進しているのを認めた (第一遊撃部隊を認めたものと思われる)。次いで一〇四〇、タクロバンの八五度約九〇裡に、空母四隻、巡洋艦、駆逐艦など六隻の一群を発見、一〇四五、攻撃隊は空母めがけて突入した。直掩機により確認された戦果はまことに偉大であった。零戦

二機が一隻の中型空母に命中、同空母は沈没した。一機の命中を受けた別の中型空母は火災を起こし停止した。もう一機は巡洋艦に突入、これを轟沈させた。

この間、直掩隊 (指揮官 西澤廣義 飛曹長) はグラマン戦闘機二機を撃墜したが、味方も一機 (菅川操飛長) が対空砲火を受け自爆した。

敷島隊の戦果はセブ基地から一二〇五、『敷島隊〇七二五「マバラカット」発「スルアン」島ノ三〇度三〇裡中型空母四隻ヲ基幹トスル四隊ノ敵ヲ一〇四五攻撃 戦果空母一隻二機命中撃沈 空母一隻一機命中火災停止 軽巡一隻一機命中轟沈』(セブ基地機密二五一二〇五番電) と打電された。

注 この電報を「大和」が受信したのは一六〇〇で、第一遊撃部隊はそのころ、「北方ノ敵機動部隊」との決戦を断念して、サンベルナルジノ海峡に向かっていた。

栗田長官がサマール島南東の敵空母群に対する追撃戦を中止し、レイテへの進撃のため、北上しつつ艦隊の終結を図っていた時、その南方約二〇裡の海面で、わずかに五機の零戦がその空母群に追い打ちをかけ、戦艦大和以下の主力艦隊にも劣らぬ戦果をあげていたなど、同長官は知るよしもなかった。

付記 米軍の戦闘状況

米側資料によると敷島隊が捕捉した敵は、C・スプレイグ少将の「タフィ三」であった。栗田部隊からの追撃をようやく逃れた同隊は、その時飛行機を収容しようとしていた。そして一〇五〇、日本軍機に不意に襲われた。これらの神風機は全くレーダースクリーンに現われなかった。すべて低空を近接して来て、レーダーの通達範囲内で急上昇し、高度五、〇〇〇呎、六、〇〇〇呎から急降下に移った。その突入は急激かつ突然であったため、上空警戒機もこれを阻止できなかった。

上を飛び抜け、命中しなかったが、搭載の爆弾が炸裂して相当の損害を与えた。空母ファンショー・ベイに突入の二機は全機撃墜された。空母ホワイト・ブレインズに向かった他の二機は、高度五〇〇呎から、四〇〇耗機銃の集中射撃を受けながら急降下に入った。そして、既に煙を吐いていた一機が途中から旋回して空母セント・ローに突っ込

旗艦の空母キトクン・ベイが最初に攻撃された。一機の零戦がその艦首を左舷から右舷に横切り、急上昇したと見るや機首をひるがえし掃射しながら艦橋を目標に急降下した。同機は艦橋構造物の



特攻機に突っ込まれた米空母セント・ロー (Official U.S. Navy photo.) から

んだ。

同空母は戦闘部署を解き、艦内第二哨戒配備にあったが、一〇五一神風機を発見したので、直ちに射撃を開始した。その砲火の間をくぐり抜けた一機が飛行甲板に突入、同甲板を貫通して下部で炎上した。たちまち格納甲板にあった魚雷と爆弾に引火誘爆、七回にわたって爆発が起きた。飛行甲板の大部分が昇降機、飛行機が数百呎の高さにまで吹き上げられ、艦全体が焔に包まれた。一一一五、同艦は「密雲のよな煙の中で沈没」した。沈没地点、北緯一度一〇分、東経二二六度五分、すなわちスルアン灯台の二〇度二〇分付近であった。

二機のうち「ホワイト・プレインズ」に向かった一機は、対空砲火の間を縫うようにして突進、「ホワイト・プレインズ」は左に舵一杯をとってこれを回避した。曳眼弾がその機体や翼のつけ根に吸い込まれるように命中するのがよく見えた。艦尾数百ヤードまで近づいた時、神風機はくるりと横転して突っ込み、命中はしなかったが、左舷外側通路すれすれをかすめ、そして水面との間で爆発した。機体の破片と搭乗員の屍片が飛行甲板に降り注ぎ、乗組員一名を傷つけた。

一時間後、空母群は再び神風機の攻

撃を受けた。一一一五針路二〇〇度で

進んでいた時、後方およそ五哩から一五機の日本軍機が隊列に近寄って来るのを、「キクトン・ベイ」が発見した(注 この日本軍機を米軍は彗星と識別している。この彗星はどこから発進したものか明らかでない)。同艦は直ちに戦闘機三機を発進させたが、間に合わなかった。同艦及び他の三隻の空母(ファンショー・ベイ、ホワイト・プレインズ、カリニン・ベイ)にはそ

の時、直衝駆逐艦が救助作業に出払って随伴していなかった。

間もなく、三機が上空に現われ、その一機が上空警戒の網を突破して、艦尾方向から「キクトン・ベイ」に突入して来た。あわや命中かと思われた時、同機は両翼を吹っ飛ばされた。しかしその爆弾は艦首右舷二五ヤードばかりの海中に落ち爆発し、また機体の一部が前甲板に激突した。

他の二機は「カリニン・ベイ」に向

かい、一機は飛行甲板に命中して大損害を与えた。もう一機は後部煙突に当たった。更に二機が突っ込んだが、命中しなかった。

[注 この神風機は〇九〇〇セブ発進、全機消息不明となった大和隊(攻撃二機、直掩二機)であったと思われる。なお、五機が突入しているところからすると、ダバオ発進の一部が「タフィ三」を捕捉したのかも知れない]



愛媛県西條市榎本神社にある敷島隊の碑、爆弾型の碑は関大尉以外の五軍神のもの



基地において

△印関大尉

カミカゼとデイソンさん

添田 裕吉 (会員)

筆者軍歴

S 17・2 { 19・3 24 F (調布)

S 19・4 { 19・12 56 F 中隊 (リバ) 氣象兵

北部ルソンで終戦

3月20日から24日まで、4泊5日の日程は実動巡拝日数2日半を、マニラ、アパリ、ラロー、クラークと移動した。クラークでは親日家で神風特攻隊記念碑建設者のダニエル・デイソン氏宅を訪れ、親しく面会できたのは有意義だった。

神風特攻碑は先年のピナツポ大噴火で埋没されたが、現在はマバラカット市の協力を得て、基礎工事が終り近く再建の予定である。

画家であるデイソン氏は、戦争末期には十四才で、航空隊の若い士官に可愛がられたという。下段の絵は当時の自分の姿を日本軍人のイメージと重ねて描いたもの。

一九六五年「カミカゼ」の本を読んだ。「神風特別攻撃隊」の英訳であった。カミカゼ一番機の発進した場所をつきとめ、記念碑を建てた。自宅にはデイソン画伯の手になる特攻隊員の肖

像画が飾られている。

私の手を取りデイソン氏は語る。

「日本人は世界の人種が平等であるべきだと主張して白人に対して立上りました。カミカゼはその象徴なのです」



ダニエル・デイソン氏宅
神風資料室

同氏と私



Daniel H. Dizon, B.F.A.

Artist/Illustrator & Historical Researcher / Writer

Founder:

Kamikaze Memorial Society of the Philippines (1970)

Member:

MVPA # 7433 (International)

Military Vehicle Preservation Association - Pilipinas

#2 Badjao Road, Villa Gloria
Angeles City 2009 Philippines

Tel.: (045) 322-4176



特攻機突入

— 沖繩軍参謀部付一少佐の手記「紅焰」より —

ら走るうちに途中で暗くなった。暗くなっても敵の夜間戦闘機のような奴が飛んで来る。時々相当低い高度で道路上を襲うように飛ぶ。敵機の行動の間隙を縫い飛行場に着いた。滑走路近くの茅葺きの戦闘指揮所で飛行場大隊長の野崎大尉以下が出迎えていた。特攻機の到着に備えて誘導準備をしている。参謀は大隊長に言った。「御苦労様です。到着が少し遅いようですね。しかし今夜は必ず来ます」

西野弘二少佐は飛行場建設担当者として沖繩の軍司令部に赴任したが、その時は既に建設どころか、伊江島の飛行場等は敵に占領されても、すぐに使えないように破壊しておく事になっていた。西野少佐は参謀部に在って幕僚業務に就き、最後は摩文仁の洞窟で軍司令官と参謀長が自決のため出て行くのを見送った後、かねてから指示されていた事に従って洞窟を脱出した。その後には数奇な運命を辿り戦後に生き残るのであるが、生々しい体験を絵筆に託し、戦没者慰霊の気持ちをこめて多くの油絵を書き添え、銀座で個展を開いたりした。また標題の本も出した。ここにその本から特攻機が突入するのを目撃する場面を転載する。なお同人は平成九年没。

(3月26日のことから)

神風特攻隊が来るぞ。一九三〇中飛行場に到着する予定だ。この特攻隊を指揮する任務を受けている神航空参謀は夕方近く首里を出発して、自動車で一時間かかる中飛行場に向かった。私も随行する。田舎道をがたつかせなが

ら走るうちに途中で暗くなった。暗くなっても敵の夜間戦闘機のような奴が飛んで来る。時々相当低い高度で道路上を襲うように飛ぶ。敵機の行動の間隙を縫い飛行場に着いた。滑走路近くの茅葺きの戦闘指揮所で飛行場大隊長の野崎大尉以下が出迎えていた。特攻機の到着に備えて誘導準備をしている。参謀は大隊長に言った。「御苦労様です。到着が少し遅いようですね。しかし今夜は必ず来ます」

大隊長は誘導準備や特攻隊出陣式の準備の完了について説明した。夜は全く暮れた。星は満天に輝いている。だだっぴろい野原の飛行場の真ん中にあるがらんとした一軒家の指揮所で、十数名の者は我が機の爆音は今か今かと耳を澄ましている。南の方からグワングワンと遠い砲声が時折聞こえるだけで寂しいばかりに静かだ。二つ、三つ黒い人影が茅葺きの家の周りを静かに動いている。時計は二三・〇〇を回っているが到着しない。或いは予定が変更になったのか。途中で機動部隊の敵機にでも捕捉されたのではな

かるうか。皆は心配し出した。参謀は一応飛行場から五軒ばかり離れた地区司令部に

引き揚げ、今後の戦闘について色々と地区司令官と協議した。もうあきらめた頃だ、と爆音らしいものが聞こえるぞ。自動車のエンジンの音か？ 爆音だ！ 爆音だ！ 来てくれたか！ 中飛行場からの電話だ。特攻機安着。我々は早速飛行場に走った。

飛行場の平坦な滑走路に続いた野原の一軒家、燈火管制のため外界は闇だ。真っ黒な巨影が地表に浮いて見える。戻って見ると特攻隊員達は先着して整列して参謀を待っていた。今この孤屋の中で厳肅な神の儀式が行われ始めた。部屋の中の長い机の向こう側に勇士達が並んでいる。数本のローソクの光が紅顔の青年達の顔を煌々と映し出す。十一名の顔は若さに輝いているが、彼等の眼は射るように鋭い。ローソクの焰は時々揺らぐ。人々の影が大きく揺れる。精魂の集い来たった殿堂のためか、神秘に近い空気が部屋を満たした。神の儀式といわずして何と言おうか。参謀の声は低いが、部屋の空気に一言一言食い込んで行く。特攻隊に命令は下された。

命令

「誠攻撃隊は明払曉本島西海及び慶良間列島の敵大型船を求めて必ず撃沈すべし。

赤心隊は司偵一機を出し同攻撃隊の

誘導並びに戦果確認に任ずべし」
嗚呼悲愴鉄血の命令は下った。広森特攻隊長は澄み切った声で任務を復唱した。私の気が動転したのか、誰かが、あなた方に続いて私も最後に特攻隊となつて出撃する、という声が幻覚の中にこだまして聞こえたように思えた。脳裡にこの幻覚がこびりついた。もし仮に私が命令する立場に立たされた場合、どういうことになつたらう。果して命令出来たらうか。森本忠夫著「特攻」からその記述をしばらくお借りしたい。

特攻の創始者大西瀧治郎海軍中將は特攻隊員を前にして、

「日本はまさに危機である。この危機を救うるものは、大臣でも大将でもない。それは諸士のごとき純真にして氣力にみちた若い人々のみである。自分は一億国民に代わってお願ひする」
特攻に行くことによって日本が救えるのだ。死のうという気持ち。日本を救うため、余りにも重い死の十字架を担わされた僅か二十歳前後の童顔の数千の殉教者。

最後のあがきが純粹な若者達に向けられた。世界戦史に類例を見ない《十死零生》の特攻作戦となつた。

地図を広げて敵艦隊輸送船の配置が説明された。本島東南八十軒に航空母

艦を基幹とする機動部隊数群、湊川南
方海上約二十軒戦艦以下十数隻、慶良
間海峡に航空母艦以下数十隻、那覇正
面戦艦以下数十隻。特攻隊員は地図を
囲んで銘々どれに突っ込んでやろうか
と考えを練っている。隊長広森中尉は
士官学校卒業の五十六期生、弱冠二十
三の若武者である。隊長は隊員に明日
の突入部署を命じた。

「離陸は〇六・〇〇、第一編隊は本島
西海岸を低空で南下し、慶良間の敵艦
を。第二、第三編隊は隊長直率し本島
西海の敵に突入」

と。その後隊長は隊員に突入時の注
意を平素教育しているのであろうが、
最後の任務を立派に果たすため細心に
行った。隊長は皇国の不滅を信じ、我々
の任務達成により戦勢挽回の糸口とな
れば幸甚であると結んだ。

今この広森中尉を初めとする特攻隊
員に会った。いや拝んだのだ。このよ
うな人達が今までの戦局を支えてきた
のだ。やがて恩賜の御酒が居並ぶ勇士
の盃に盛られた。

美化することが能ではない。人間と
しての心の流れを見えなくするような
ことがあってはならない。これをすべ
ての若人に達観があったのだろうか。
明日の朝、いや六時間後には帰り来ぬ
永遠の旅路に出掛ける若人達、盃をお

し頂いた後、屈託のない爆笑が湧いて
来た。今日は敵の戦闘機の警戒線をつ
ぱしって来たのだと、隊長がその有り
様を語り続けるうちに、急にくだけた
雰囲気部屋に溢れた。

紅い林檎顔は綻び、皆椅子に腰を下
ろして御馳走を食べ始める。御馳走と
言っても野戦料理だが皆若い。お酒よ
りも菓子の方がよさそうだ。お菓子を
はおぼりもごもごやっている。参謀は
部屋から出て黒い木陰に寄った。三日
月が出ている。無数の星が天空に輝い
ている。じっと空を見つめている眼か
ら涙が流れ出ている。尊い運命を背負
わされた若者達、命令を下した者も、
うつつのものとは思われなかったに違
いない。

明朝〇六・〇〇に特攻隊が出撃する。
我々は深夜の道を軍司令部に向かっ
て急いだ。

27日の朝はほのぼのと明け始めた。
首里城址の藪かげに身を隠して水平線
の彼方を見張った。朝風にちぎれ雲が
中空にかかって動こうとしない。明け
空は薄い紅化粧だ。油鏡のような海の
面も漸く朝の眠りから醒めたようだ。
東には中城湾、南には島尻半島がぐうっ
と足を伸ばしている。島尻の向こう水
平線上には慶良間列島が横に長くのし

かかっている。その間には敵の艦隊二
十数隻、朝霧の中に散見する。

西南足下の低地は去年10月10日の空
襲で灰燼に帰した人影のない焼野が原
の那覇の街跡、西は東支那海。悠々と
一列縦陣で巨艦が波をけって北行して
いる。更に右に目を転ずれば北、中飛
行場が森の中に赤肌の地面を晒してい
る。朦朧とした朝の包みは未だとざさ
れたままだ。我々は〇六・〇〇を息を
こらして待つ。軍司令官等も山頂に居
られる。敵機は未だ一機も飛んでいな
い。

数分後の彼等の鉄槌を敵艦は御存じ
ない。大地を揺り動かすような爆音が
北から湧いて来た。怒りの爆音は、お
お、西海岸沿いを超低空飛行で三機編
隊、矢のように飛んで行く。くっきり
見える日の丸の印、もう一組が海上に
小さく電光のように天翔けている。旭
光に照らされキラキラ反射する。天翔
ける神々だ。頭が下がる。莊嚴の極み。
武人的表現をすれば衆人環視の内に栄
えある駒を進めるといふことだ。突然
グワングワンバリバリ、グワングワン
バリバリ、大海は早太鼓を打つように
猛然とうなり出した。その音は遠く深
く海の彼方にこだまして、——敵艦隊
の対空砲火だ。嗚呼我が神風特攻隊に
幸あれ！

やった！ 慶良間の沖に火柱がバツ
と上がった。グワイン！ 爆裂音が余
韻を引いて海からやってくる。また上
がった。火柱、黒煙、濛々茸のような
黒い煙柱が水平線上に立ち登った。次々
に十一本の火柱、何本かは瞬時に消え
今まで見ていた艦影もなくなった。撃
沈だ。撃沈だ。敵は余りにも脆く沈没
してしまった。

戦は瞬時に終わった。今戦のあった
鏡のような海の面には未だ炎々と六つ
の火柱が立ち、黒煙は高く高く天にう
なぎ登りに登っている。敵にとっては
突然の余りにも無残な出来事だった。
敵は早朝から奇襲の強打を受け驚愕し
たに相違ない。海上に火をふいて沈み
かけている軍艦の外には一艦も見えな
くなった。蜘蛛の子を散らすように我
が視界の外に逃げ去った。広森達郎中
尉ら十一名、十一機の特攻機は五百疋
の爆弾を抱きガソリンを満載して敵艦
に体当たりをして数隻の敵艦を撃沈し、
或いは大破せしめた。英魂よ、これか
らの我等の戦いを照覧下さい。
特攻という常識では考えられない行
為、青年達の恐怖を克服し混乱した戦
の中に指揮官と共に糸乱れず任務を
達成した。我が反撃は開始された。特
攻機によって火蓋はきられた。驚いた
か、敵の奴。熊蜂の嵐のようにグラマ

ンを飛ばして来た。やれやれまた空は敵の独壇場だ。いや空だけではなく海も陸も敵のものだ。心配した誘導機は無事帰還したと報じて来た。前日にも増して艦船群が見える。今日は小禄飛行場方面に艦砲射撃が向いている。

極めて戦術的に海岸付近の我が砲の隠蔽陣地とか水際障物、水際陣地等に正確執拗な射撃をやり出した。これこそ敵の上陸企図を明らかに露呈するものだ。単なる威嚇でも、他島に上陸するための牽制作戦と考えるわけには行かぬ。敵の上陸は時間の問題となった。神経は高鳴りする。いよいよ世紀の大決戦だ。

炎の特攻隊

人生二十三年夢幻の

幼き日 少年の夢 若き生命

父おわす 母おわす 故郷の森は

想はめぐる

つきせぬ想めぐりめぐる

戴く御盃の底深く

無限の思いはとざされて

やよ待て きびしき誓を知らざるか

汝 女々しきを去れ

嵐 嵐 嵐なるぞ

七つの海奥深く起れる

高き波 空を蔽い

くだくる波はたぎり狂う

土を焦がして雄叫び来たる

みおやの国危うきぞ

迅雷胸にこだまして

はやなる鐘を抑えつつ

我入りて怒りの海を鎮めさまん

浮世の垣をふみやぶり

久遠の流れに棹さして

やよ 総ては去れ

名声 楽しきもの

おごり 汝も去れ

総ては敵かに去れ

満てる御盃を傾けつ

赤き焰のその面に

飛龍一火の眼差しは

とどめさすべし敵艦を

明日は諸共花と散り

黒き海潮を血ぬりつつ

正しきもの来たれ

清きもの来たれ

強きもの来たれ

永久の御宴にはべらいて

恩賜の御酒の香によわん



油絵 同人画



偲特攻烈士

翼下俯瞰開闢岳

烈士從容如富嶽

報君恩機將到來

殉國壯志奇致馬愕

平成七年六月六日

南九州上空機中

西三



会員の高橋正二氏より右の漢詩を頂いたので掲載する。

開闢岳は薩摩半島の南端に在り、知覧や万世を發った特攻機の本土見納めとなった。



炭筆画

特攻隊員の 人を恋うる歌③

人間魚雷回天のこと

「発進用意！」

潜水艦長の声。こころなしか沈痛だ。母潜として背に搭載してきた「回天」を、いままさに敵艦船群にむかい、解き放とうとしていた。

「発進用意、よし」

回天搭乗員の、力づよい応答がある、腹の底からわき出してくるようだ。

搭乗員の最後の深呼吸が、母潜にも聞こえるような一瞬である。

母潜からの操作で、回天をしばらくつけていたバンドが外される。と同時に「ドーン」

大きな起動音である。

ついで、ガリッと、電話線を切断する音がつたわってくる。

必死必殺の人間魚雷が、母潜から放たれ、目標の敵艦に向う一瞬である。

母潜の艦長が潜望鏡にとびつく。

黒い海面に、ちらっと青白い航跡が見えて消える。

「駛走状態良好」

聴音室からの報告が入る。あとは心をしずめ、敵艦方向からの大爆音を祈りつつ待つ。

上原光晴著『回天』その青春群像より

回天創始者黒木大尉と仁科中尉

黒木博司（海機51期、陸55期に相当）

は、19年9月7日徳山湾内で訓練中浮上せず殉職、艇内に二千字に及ぶ詳細な事故報告書などがあった。その中の辞世の歌

国思ひ死ぬに死なれぬ益良雄が

友を呼びつゝ、死してゆくらん

仁科関夫（海兵71期、陸56期に相当）は、黒木と共に回天の創始者だったが、黒木亡き後菊水隊の先任搭乗員となり、

イ47潜に乗り19年11月20日、黒木の遺骨を抱いてウルシー泊地に突入した。

君が為只一條の誠心に

当りて砕けぬ敵やはあるべき

回天の特攻戦死者は一〇四名と記録されており、協会が収録した遺詠は八二人、一一七首ある。そのうち父母を

憶うものを拾ってみると、

石川誠三 海兵72期 金剛隊イ58潜

20年1月12日 グラム島アブラ港

思はじと思えどとかく思い出づ

故郷の母よ健やかにおわしませ

母上よ消しゴム買うよ二銭給えと

貧をしのぎし あの日懐し

宇都宮秀一 東大予備学生3期 菊

水隊イ37潜 19年11月20日 パラ

オ コスソ口水道

我が母の心籠りしおむすびを

押しただきて香を懐しむ

塚本太郎 慶大 予備学生4期 金

剛隊イ48潜 20年1月21日 ウル

シー近海

今一度肚打ち割りて話したく

言はず未練よ父の面影

物言はで我も得言はず別れ来し

父なつかしく思う蟬の音

この日をば父は肴に飲みたるや

とこしへにあれ征出し日の如

水井淑夫 九大 予備学生4期 多

聞隊イ58潜 20年8月10日 沖繩

東方海域

送りくれし数々の文見つめつつ

別れし去年の 母が眼を恋う

佐野 元 一飛曹 甲飛13期 多聞

隊イ366潜 20年8月11日 沖繩東

方海域

巢立ちたる我を思いて神参る

母の心の すがすがしさよ

阪本宣道 二飛曹 甲飛13期 20年

4月7日 訓練中殉職

うつけみのかるき命と思へども

父母君の 悩み悲しも

兄弟姉妹の作

市川尊継少尉の妹 二宮弥生

遥かなる豊後水道こえしまま

永久に還らぬ君のおもかげ

市川少尉 早大 予備学生4期

千早隊イ370潜 20年2月26日

硫黄島海域

千葉三郎一飛曹の弟 千葉四郎

兄征きし瀬戸の小島に光あり

戦の跡のこす渚も

千葉一飛曹 甲飛13期 振武隊

イ367潜 20年5月27日 沖繩近海

後の人の作（回天記念館を見て）

母恋うる若き兵士の絶筆に

胸熱くなり涙のくもる 荒川紀子

故郷の母を恋いつゝ征きしとふ

少年兵の遺言を読みゆく

山田和子

学徒より志願して人間魚雷に乗りし
とう
その年代の子をもつ吾は

森 園子

記念館に兵士の遺書の墨濃ゆく

死語にひとしき忠の太文字

平田八重子



石川誠三中尉

特攻戦死した人達の文集

会報42号(H12・2)と43号(H12・

5)に、騎兵学校幹部候補生隊9期で、教育末期に航空に転科し、後に特攻戦死した9人について掲載した。騎兵から転科した人のことを採り上げたのは、私が萌黄会(騎兵将校だった者の会)の世話人をしており、幹候出身者の名簿も所持していて掌握できたからである。

ところで、騎兵幹候9期の世話人をして、緒方惟隆さんから、「航跡」に載っているこの9人の作文を提供された。「航跡」とは、大刀洗陸軍飛行学校菊池教育隊で、基本操縦を学んだ甲種幹部候補生9期(操縦)250名が、卒業記念として、19年3月に発行した28ページの文集である。「航跡」の現物は、紙質も悪くガリ版刷りで非常に読みづらいとて、緒方さんは9人の文章を、ワープロで打ち直して提供された。読んでみると、どの人も個性豊かで、会ったことがなくとも、追慕の念が湧くのを覚える。

朗景漫筆

猪股 寛

20F 20・6・1戦死

一、ピスト軍紀

空は青く白雲が飛来し阿蘇は悠然と白煙を噴いている。絶好の飛行日和。例により赤トンボがゆらりゆらりと飛んでいる。さすがに区隊長殿も常になく白面に微笑をたたえ何か言いたい様な言い難い様な様子だ。学生席には紫煙が頭上を蔽っている。

区隊長殿ニヤリとして後を向く。サツと緊張の一瞬。曰く。

「オーイ誰か煙草を呉れ」

二、罪は何れに在りや

九州名物の三寒四温の三寒に入り、空は暖く風が冷たい。小生の航空服は三号の銘が打ってあるがどうも二号らしく指先迄スッポリ入る。食堂からの帰りに声あり。

「オーイ其処行く見習士官。いやに身体つきが小さいね」

後を振り返ると上登能准尉殿。小生の体重は六四kg身長一六七cmなり。

三、勤務と演習

週番士官は橋爪少尉殿。温顔は親父の感を抱かせる。「計画的に行事をな

せ」の仰せに従い、体操、軍歌演習、号令調整を盛んにやる。

閑話休題

我等が愛機 号に飛び乗る。始めは張り切るが機が思う様に飛ばぬと意気次第に消沈。

「警戒良し第三旋回」

伝声管に助教稲田曹長殿の声あり。

「毎日の号令調整はかかる場合に応用するものなり」と。

四、対話

「B君就職は何処だい」

「シナイ」

「ヘエさすが拓大出は違うね」

「シナイだよ」

「何東京市内、また派手な所を選んだね」

「分らんね。シナイだよ。空中勤務者はシナイがよか」

五、戦友O君酔いが廻ると例の如く一席論ずる

「よろしく我々はこの光栄ある国土に生を享け光栄ある機会に恵まれ、男子の本懐これに過ぐるはなく、身命もとより論ずるに足らず。唯我が抱懐する理想我と共に朽ちせしむるを惜しむ。

宜しく我が意志をつがしむる人間を必

要とす。この点に於て感受性強き聡明なる女性を以て最適任者とす」と。

成程彼の教育宜しを得て後継者より名文名句到来す。

ゆらぎぬる心のうちをおし静め

戦はず君の命をし思ふ

この勧め余り易けん戦線に

とゞかざるかと心たゆたふ

随感随想

事物を理解するということは一旦事物の中へ入った上でそこから出て来ることである。だから先ず虜囚が次に、解放が必要である。幻想と幻滅、己惚と覚醒が必要である。まだ魅力にかかっているもの、魅力にかかった事がないものは共に語るに足りない。自分が先ず信じてその後批判したことでなければ、正しく認識することが出来ない。

把握するためには一度把握されて再び自己の独立を獲得しなければならぬ。理解するためには自由でなければならぬが、自由だったばかりではいけない。これは芸術についても宗教についても愛国心その他についても真である。同感とは批評の第一条件である。感動は理性の台座であり正義の先行条件である。

× × × × ×

斯くて菊池の駅に予定の四倍の時間を費して着く。命拾いをしたような気持で駅の前に出るや、飛行場らしきと思われる方面に頭上をかすめる一機。我等○百名は思わず一斉に空を見上げるのであった。

想ひ出

山本 三男三郎

4 F 20・4・18 戦死

グライダーの一ヶ月間。

苦しかったけれども又反面楽しいものでもあった。

「一、二」「一、二」とゴム索を引く時はあまり有難いものではなかった。特に張り切って引くにも拘らず重量七十キロもあるのを搭載すると普通の人であれば五、六米も飛び上るのにガサガサと芝を切って地上滑走が終る。引く方もがっかりだが、乗った御本人は亦落胆する。最大の労力を以て最小の効果を得るといふ、経済原則でも作れそうだ。

反面こんな所もあった。

報告の時には「一米の跳躍」と云いながら実際は四、五米も飛び上り、フラフラと落着いたりして助教さんを青くさせたりした者もあった。彼は体重

が四十何キロだかだそうです。

グライダーをこわした数では何処の組にも負けない程だった。

此の航跡へ出す原稿を書きながらもスクラム組んで頑張った十七人の顔の一つ一つが次から次へと浮んで来る。何時迄も消え去らぬ良い思い出だろう。

無題

西尾 卓三

17 F 20・4・1 戦死

航空ヲ志願シタ時矢張り命ハ無イモノト考ヘタ。今モ同ジ様ニ予想セラレラレナイ。運ナリ仕方ナシト云フ様ナ氣持ナリ。不運ト云ヘバ不慮ノ交通事故ニ依リ命ヲ失フモ不運デアアル。ソノ場合ハ生キテ居タナラバ為シ得ベキ多クノ価値アルコトヲ唯失ツタ真ノ不運デアアル。然シ例ヘ自分ガ初陣ニテ散ルトシテモ確ニソノ様ナ不運デハナイ。誰カゞ死ナ、ケレバ完遂出来ヌ此ノ戦デアアル。

学生時代ニ普遍的抽象的ナルコトヲ考ヘルヲ好ンダ。然シ其レガ極メテ内容空疎ナ無力ナルコトヲ感ジ始メタ。出来得ルナラバ自分一個ヲ超エタモノ

ヲ掴ミタイト思フ心ニハ変リナイ。只其レガ現在ニ於テハ近キ日敵ヲ空ニ於テ撃滅スル為ニコノ身デコノ任務ノ下デ最善ヲ尽クシ、又自己ノ務メニ透徹スルコトガ道デアアル。

如何ニシテ最モ良ク敵ヲ倒スコトヲ得ンカ。日本人トシテ如何ニ己ヲ修ムベキカ。決シテ暇デアッテハナラヌノデアアル。

自分ノ精神ガ死ニ対スル本能的恐怖ノ為ニ敗レザル様鍛錬シ、単ナル不運ニ陥ラザルヤウ務メン。

人生感

小野 生三

誠38 20・4・6 戦死

世の中には随分悟り切れない人間が多くあるが、悟り切れないのが普通であって、我々凡庸な者は一生掛っても悟りを開く事が出来なくて死んで行く者が多い。

悟りが開けなければ色々の苦が生じて来る。苦しみと云うものは、欲望と正比例して増して来るものである。人間と生れて誰しもが栄耀栄華を思い楽しく面白く暮し、なるべく長生をしたいと願うのが当り前であるがままにならぬのが人生である。そこに苦しみ

あり懊悩がある。そこで我々が幾分なりとも悟りに近づくと為には先哲の教えに従って吾々の信念を固めて行かねばならぬ。

一勺水即具四海水味世同

千江月総は一輪月光也

心王宜將默朗

之の文句をよく考えて見ると吾々は幾分人生に対して気が楽になった様な気がする。頭の良い人はすぐ悟るかも知れない。

国民学校児童よ健かなれ

粕川 健一

八紘隊 19・12・7 戦死

湯周経路第三旋回前右翼下に高永部落の国民学校がある。僕はこの経路を通る度にいつもこの国民学校の校庭を見るのである。偶々日曜等校庭に児童の姿の見えない時は一抹の寂しさが僕の胸の中を流れる。僕の故郷の学校も高永の国民学校と大差ない。朝八時頃は多分朝礼であろう。全校生徒の整列する元気な姿が目に入る。空を飛ぶ十秒内外にて国民学校の状況がすっかり解る様な気がする。校長先生の鼻髯が上下してその中央からしづい朝の挨拶とお話がある。児童は元氣よく「ハイ」

と答える。その声が愛機の爆音を通して聞こえて来る。十時頃、白、赤、青色取々の色彩による体操が始まる。約三十名の児童の姿がある。若い元氣な先生は彼等と共に飛んだり跳ねたり。時には悪戯兒はお目玉を頂戴しているのではないかと思われる。校舎の一隅の唱歌室にては男の子、女の子、初等科一、二年生の黄色い歌声が聞える様だ。女の子はいやにすまして先生の云う事を聞く。男の子はあちこち他見をして、時偶やけに首すじをのばして出ない声を張上げると云った具合に。昼頃小ちゃんお母さん々でお母さんの心をこめた弁当箱が開かれる。林檎の如き頬べたは益々ふくらんで風船になったり怒った鬼の様な顔になったり、又それが綻ぶと云う様に。

さあ第三巡回近し。国民学校の真上だとなると、眼鏡ごしに首をのばして、小国民の学ぶ姿を見、嬉しそうにはしゃぎ廻る姿を見、頼もしさがこみあげる。彼等は毎日頭の上を飛ぶ黄色い練習機を、どんな気持ちで眺めているだろうか。其の上を飛ぶ僕等はいつも小国民の前途に光明あれ、幸あれかしと祈り、幼き日の思い出に恍惚となる。

可愛い彼等の前途は我等が双肩にあり。俺達は頑張るぞ。だから皆も体を丈夫にして呉れと祈る。我南溟の空に

消ゆとも、菊池の空は心の故郷であり、高永国民学校児童は空からのお友達だ。皆んな健やかなれ。

初單獨空中所感

準備線で励まされ
ふはりと離陸無我の境
遂に飛んだよ獨りで我は
これではいかぬと又必死
「ホラホラ右右ソラ左」
冷汗背筋をつたい来ぬ

出発線で武者慄ひ
水平飛行で漸く平常
然し之から着陸か
返し始めて目がかすみ
飛行機止って警戒よいか
けれどもこれが喜びは
警戒よいか いざ出発
あゝ我飛べり我飛べり
降下し初めて寂しさと不安
着陸接地でどっこいしょ
精魂つきたり準備線
鬼が首とはこのことか

修養雜記

田中 穰二

一字隊 19・12・7 戦死

一、力を常に出す人は強い力が残る。

声を常に絞る人は丈夫な咽喉と声が残る。斯くの如く軍歌演習にしろ号令調整にしろ常に声を絞って出す者は勤務についても嗶声にならぬ。且つ又指揮が徹底する。我々は常に何事も実行力を旺盛にせねばならぬ。

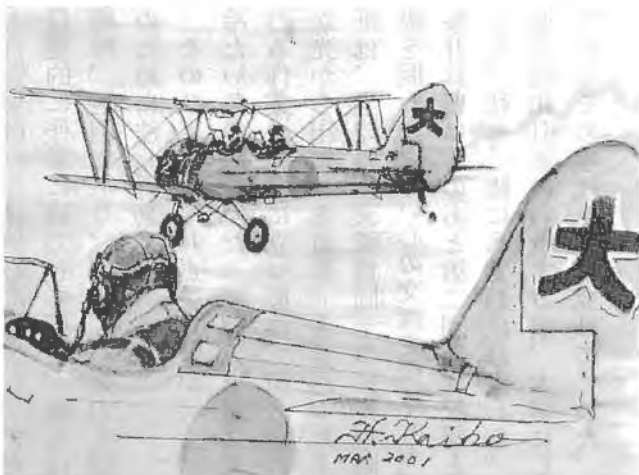
二、良き考え方良き聞き方良き見方の出来るような人間になりたいものだ。其の為にもっと責任をもっともっと重荷を負い悲しみも味っておきたいものだと思ふ。

三、人間の心の中にも良い心はず雑念邪念に負ける。正しいものは悪いものに押し倒される。人は余程油断なく心の雑草を取る事を心掛けねばならぬ。その為には修業修徳試験練の中に自ら求めて飛び込まねばならぬ。

四、月も星も電燈も夜の空に輝く光は強い。併し朝の太陽は四海山野を照らす。月も星も電燈も光を失う。太陽は他の光を押し消すのではない。只自ら強く光るだけである。世界各国

にそれぞれ思想も宗教も光っている。それを押し消すのではない。其の光の力が見えない程眩しい強い光を持つものが日本精神でなければならぬ。争を越えて超然として聳ゆる日本を完成せねばならぬ。

五、決戦の日本は敗ける事の出来ない日本である。必勝日本人のすべては小さい自分の立つ事に焦らず、自分の努めを果した悦びに燃えねばならぬ。道を守り抜いた感激、義理の立つた誇りに生きる、此れが決戦日本人の姿でなければならぬ。



少飛会海法画

忘れ難い人たち

回天⑨

小灘 利春

河合 不死男

愛知県出身。海軍兵学校72期。回天搭乗員。

第一回天隊長として沖繩に向かい戦死。没後大尉。



回天は人間が操縦する「魚雷」であるから、もともと潜水艦に搭載されて敵の前進基地に近づき、発進して泊地内の敵艦隊を奇襲したが、次の時期は広い洋上で航行中の艦船を求めて攻撃した。戦局の急迫にともない、さらに陸上基地から出てゆく回天隊が次々と編成された。その第一陣として河合不死男中尉を隊長とする第一回天隊、通称白龍隊が光基地から20年3月沖繩へ出発した。

河合中尉は愛知県の出身で、成章中

学から海軍兵学校に入り、戦艦榛名に乗組んだのち潜水学校に進んだ。故住宏少佐が昭和20年1月、パラオ諸島コッソル水道を目指して伊号第53潜水艦から発進し、直後に気筒爆発の災厄に遭って自沈したが、同少佐とは兵学校で同期かつ同じ分隊であった。潜水学校で再び一緒になり、また揃って回天搭乗員を志願した。大津島基地が開隊してすぐ訓練に入り、真先に出撃搭乗員の発令を受けて記念撮影まで済ませていたのに、回天初出撃の菊水隊が直前になって規模を半減されたため、彼の参加は再三の請願にもかかわらず延期された。

彼は大柄なほうで色白であった。出撃の壮行式のとき私も大津島から駆けつけたが、烈しい集中搭乗訓練のあとにもかかわらず彼はさらに太って、一段と恰幅がよくなっていた。日本刀を杖に立つ彼の姿は戦国時代の凛々しい武將そのものに見えた。

性格は朗かで、訓練中はいざ知らず宿舎でくつろぐときはいつも嬉しそうにウフウフと笑っていた。当時大津島にいた同期生一四名は次々と一人残らず出撃し、私以外は還る者がなかったのに誰もが楽しそうで、暗い顔つきを見ることはなかった。

しかし彼は教育、訓練指導には厳格であった。僅かな操縦ミスで一つしかない生命がたちまち消し飛ぶ、緊張の毎日であるから、当然精神の引締めが常に必要な部隊なのである。同時に彼は厳しいばかりの人間ではなく、人の命を大切にすゝる気持ちが人一倍強かった。真冬の寒風吹きすさぶ海上で訓練中の回天が岩礁に正面衝突して動けなくなったとき、彼は直ちに衣服を脱ぎ捨てて裸になり、腰にロープを巻いて荒れる海中に飛び込んだ。自分が凍死する危険を冒して遭難回天に泳ぎ着き、ロープを取り付けて曳き出し、搭乗員の無事救出を成し遂げたのである。

特攻隊員の名前が「死なない男」と

は意外性があり、これもまた搭乗員たちに敬愛され人気が高い要素のひとつであった。この変わった名前は御両親が大正十一年の元旦に生まれた長男の彼の長命を願って名付けられたものという。

河合中尉は新設の光基地に移動し、ここが第一回天隊の本拠になった。操縦訓練の日程の都合と、陸上発進の訓練に適した場所が大津島の近くにあるため両基地の間をたびたび往復した。重量8トンの回天を洞窟から曳き出して海に浮かべる、すべて人力で進める

発進作業を、大津島の予科練出身の下士官搭乗員たちは熱心に見学し、また自発的に作業に協力していた。彼らは純粹、活潑であり、精一杯の努力を国のために注ぐ行動力があつた。

そのひとりに桜井貞夫兵曹がいた。冷たい冬の海に浸たって回天を海に入れる作業の先頭に立つ彼に、河合中尉が光から出撃する直前、書き送った手紙は、当時の回天隊員同士の出身や階級を問わぬ温かい心の交流を偲ばせる。桜井兵曹はそのあと第二回天隊配属となり、私と一緒に八丈島に進出した。彼は昭和61年に病没する前、大切にしていたその手紙を私に見せてくれた。

第一回天隊は隊長以下七名の回天搭乗員が基地要員一二〇名とともに昭和20年3月13日、第18号一等輸送艦に乗り光基地を出撃した。佐世保に寄港し資材を積込んで沖繩に向かったが、入港直前の3月18日未明、那覇北西の粟国島付近で米國潜水艦スプリンガーに遭遇した。三度にわたって魚雷計8本の攻撃を受け、輸送艦は一時間もの交戦のちに遂に沈んだ。河合隊長以下便乗中の第一回天隊は一二七名全員が戦死、輸送艦の乗員二二五名も全員戦死した。

両方とも名簿がないため隊員、乗員

の氏名調査に長い年月がかかったが、輸送艦については乗組全員の氏名住所を明らかにすることができた。しかし第一回天隊は僅か14名が判明したにとどまり、今なお我々は手掛かりを求めて調査を続けている。

故・河合不死男大尉の墓碑は大きく立派であり、陸軍大佐であった叔父と併刻されている。その叔父上に宛てた出撃当日の彼の遺書には「毎日出撃を願ひ、今回出撃を許可され勇躍出発することと相成り候。帝国を護るもの、最後の兵器はこれ以外に絶対なきものと確信致し候。吾人等軍人としてこの種特別任務は当然過ぎることにて今更ここに特別任務と申し立つるも恥づかしき次第と存じ候。(中略)

偉大なる建設への礎石として、武人の死場所を得候こと、皆これ叔父上様の平素の御訓育によるものと唯々感謝に堪えず候。(後略)」

終戦後、光基地に唯ひとり残った同期生が渥美半島の彼の実家を訪ねて遺品を手渡した。そのときのアルバムは彼の心情を遺す率直な記録であり、御親族によるホームページ「回天特攻隊」で現在紹介されている。

故・河合不死男大尉書状

「宛：桜井貞夫殿 発：河合中尉」

(昭和20年3月)

桜井 有難う 何も言うことはないあの樺島の 率先躬行の裸体突撃精神こそ若い血潮の花である 感激である

一度飛び込んで また飛び込む あの精神 何よりもかえ難い玉である

此の精神を絶対に忘れるな

俺は 貴様は是非一緒につれて行ってやりたかったが 巴むを得ざるものあり

貴様をあざむきしこと 許してくれ俺も帝国海軍々人である 貴様等の

若き血の溢流を決して濁したくはないのだ

総て己を空しくして頑張ってくれ頼むぞ

桜井 今の気持ちを持ちつづけて行

け 貴様の最後を俺は祈っている

有吉と共に血書したあの文は 俺はもっている

俺は貴様等の本当に純なる気持ちに何度泣いたか知れぬ

貴様の心に俺はかえって教えられるところがあったのだ

海軍中尉の俺が 貴様等に教えられる事が多々あったことを 俺は貴様に白状する

桜井 俺は貴様と会わずして出でゆく

貴様の御守をしっかりと身につけて

出撃して行く

そして 貴様の御守と一緒に 敵に

突っ込んでやる 必ずやるぞ

貴様も必ずやれ 俺の後につづけ

大津島の九分隊は貴様で引っ張って

行け 頼む

では 桜井 御機嫌よう

二飛曹 河合中尉

桜井貞夫 殿

注：

(1)桜井貞夫

兵庫県多紀郡篠山町。海軍第13期

甲種飛行予科練習生出身(奈良空)

回天搭乗員。大津島基地配属。20年

5月第二回天隊で八丈島に進出。上

等飛行兵曹で復員後、野球団「南海

ホークス」捕手などで活躍。

兵庫県尼崎市居住。昭和61年11月病

没。

(2)有吉

有吉睦男。福岡県鞍手郡。同右回

天搭乗員。大津島基地配属。

(3)樺島

徳山湾内大津島の東隣にある小島。陸上基地回天の発進作業訓練に使用。

回天に青春をかけし人に捧ぐ

国難迫る この海に

誰か救はん我措きて

我がたらちねよはらからよ

守らん五尺の体もて

人生僅か五十年

そのなかばにも満たずとも

見果てぬ夢に変わりなし

嵐に向かう 桜花

頼みの魚雷 必殺行

水つく屍かねてより

我が選びたる道なれば

直慕進し悔ゆるなし

祖国の山河遠ざかり

沖の鷗も別れ行き

母潜の響にまどろみて

思いは巡る幼き日

言ひ残すこと既になく

今の思いに筆とれば

別れし友よいづれまた

語り合うべし靖國で

目標近く色めきぬ

母潜の人の御武運を

祈ると言ひて乗込めば

明鏡止水 わが心

ホームページの掲示板紹介!!

会報前号(48号) 11頁にてホームページ開設(7月16日)をお知らせしましたが、本日(9月30日)までに掲示板へ一万件を越すアクセス(接触)がありました。

掲示板は誰でも自由に意見を交換し合う場所ですが、その中で若い世代のやりとりについて紹介致します。

7/24◎しずか (これは自己紹介) はじめまして。「知ってるつもり」見ました。悲しくて涙が止まりませんでした。戦争とは過ちであり、特攻隊の人たちが犠牲になってまで残した日本。中3である私はいろいろ考えました。

みなさんに質問です。かなり昔、3年前くらいにTVで放送した「二十六夜まいる」という特別ドラマを見た方はいらっしゃいませんか。武田鉄矢さんが原作の。もしくは鹿児島の開聞岳へ行った方、知覧の記念館へ行った方。私は特攻隊についていろいろと感動し涙しました。その思いや、記念館や特攻隊の皆さんがいた場所、いろいろと教えてください。論文として、本格的に考えようと思います。

「平和とは何か?」「二十六夜参り」を見て感動した方。詳しく知っている方など、いろいろあなたの考えを聞か

せて下さい。お願いします。

また掲示板に来ますので、よろしくお願ひします。

この書き込みを読んでコメントを述べている人がいます。

7/28◎鹿屋市民A氏
今日も鹿屋は群青の空です。

若い方々がいっぱい書き込みされているのを拝見しております、感激致しました。思わず筆(キーボード)を執らさせていただいている次第です。

現代の若い方々が「戦争」という不幸な時代、そして「特攻」という事実に関心を示されたことはとても大事なことだと思っております。

「知ってるつもり(新説ホタル)や映画の「ホタル」を見て感動し涙された方々の「思い」は、自分の家族や大切にしたい人を、心から愛することができる「思い」であり、命の尊さを重んじることのできる思いだと考えます。

この「思い」がいまの現代にも立派に通じていることをともうれしく思いました。これからも、その「思い」をどうか大切に引き継いで語り継いでいただきたいと思ひます。

ところで若い皆様方にお願ひがあります。この日本が、なぜ?戦争に突入していったのか?という「真実の経緯(いきさつ)」を知っていただきたいと

思つたのです。欧米国に無理やり引きずり込まれた「自存自衛」のための、やむを得ない戦いであったことが理解できると思ひます。正しい史実を認識頂いたとき、「日本の誇り、尊厳」に気付かれ、日本に生れ育ったことの喜びを、さらに実感されることと思ひます。

ところで私は鹿屋航空資料館(<http://www.synaps.ne.jp/msbf-ks/index.html>)の近くに住んでおります。今日も鹿屋は群青の空です。戦争当時は近隣に、笠之原海軍航空基地と串良海軍航空基地がありました。ちなみに鹿屋航空隊も「旧海軍基地」です。

皆様、鹿児島へお立ちよりの際はぜひ鹿屋へも立ち寄って観られて下さい。元特攻隊員であったKさんが「ゼロ戦」のところで当時を説明して下さい。またちよくちよく書き込みさせて下さい。(文章が長くなり失礼致しました)

このように意見の交換が行われています。

此度ニューヨークで発生したテロについて書き込みがされました。

9/13◎悠久の大義氏

今回の無差別テロ事件に対して「特攻」だの「神風」だのと書き立てるマスコミを悲しく思ひます。特攻隊員は決して非戦闘員・一般市民を無差別虐殺したものではありません。彼らが目標

としたのは敵の軍艦、軍用船舶、軍用機、軍事目標、兵器等であつて、彼らにしてみれば迫り来る敵の、同胞への「無差別テロ」の脅威であり、これらに敢然と立ち向かつたのです。彼らの行為の真の意義は今回の「ユナイテッド・エアライン93便」の一部の乗客たちのように祖国・同胞の危機に対して身を捨て、迫り来る敵に立ち向かつたことです!!このような英雄的行為を故意に無視・ないしは誤解するのは全く情ないことです。どうか正しい「歴史認識」を持って下さい。

この意見に対して
9/14 えり(この人は高1だそうです)

私もあのニュースがアメリカで流れていて、パールハーバーの様だといわれたのはショックでした。日本のはただ布告(原文のまま)が手違いによって遅れてしまっただけだし、アメリカだってその真実を知ってるはずだし、アメリカに住んでたこともあつて、ある意味で尊敬してた国からそういわれるのは本当にショックでした。もっと真実を重視する国だと思つてたし。

アメリカの上がやつた事はアメリカの記者の人が暴いたり、そういうの、本当に格好いと思つてました。へこれからも紹介続けます。以上